2021年度　自己点検・評価報告書

文学部評価分科会

2022年3月

基準１　理念・目的

① 学部・研究科の目的を適切に設定しているか。

② 学部・研究科の目的を学則又はこれに準ずる規則等に適切に明示し、教職員及び学生に周知し、社会に対して公表しているか。

【１】2020 年度の自己点検・評価および外部評価で課題となった事項
文学部 3 指針を入学ガイダンス資料『文学部での学び方』に明記すべきである。資料には、授業等を通じて理念・目的等について学生に説明する機会を設けていることも記述すべきである。 その他は問題なし。

【２】2021 年度の方針・改善計画（および中期的な改善計画）
文学部 3 指針を『文学部での学び方』に明記することになった。理念・目的については、学部ガイダンスや履修相談会で説明する他、必修の「人間学」で深く掘り下げて学習することを明記する。

【３】2021 年度の取組みの点検・評価と 2022 年度以降の方針
【２】の点検・評価については今後の作業となるが、23 年度からの新カリキュラムの策定に合わせて、文学部の 3 指針を含む学部の理念・目的については、３ポリーシの見直しも含めて点検・評価していく。また、学生自治会主催の「３指針」に関する学習会と連携をはじめ、さらに周知・学習の機会を拡大していく。

基準４　教育課程・学習成果

① 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

② 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

③ 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

④ 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

⑤ 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

⑥ 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

⑦ 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

【１】2020 年度の自己点検・評価および外部評価で課題となった事項
④ ポートフォリオの体系的活用について、DP の「６．学ぶことの意味を理解し、自律的学修者とし

て、目標をもって自己の成長を図る」と関連づけて記述することが望まれる。

⑥ ルーブリックについては、教育効果を測定しながら点検・改善する予定であることを示すべきである。

⑦ 「成績評価に関する実態調査」を通して、教員間での評価のばらつきを可視化し、教員による改善を促している点について触れるべきである。

【２】2021 年度の方針・改善計画（および中期的な改善計画）

③ カリキュラムポリシーを 12 項目にわたり、体系的に定めて履修要項に明記している。これらの項目が掲げる目標が適切かつ体系的に達成されているかを点検するため、本年も学生に対するカリキュラム満足度調査を実施する。昨年は、同調査で学生がカリキュラムについて概ね満足していることがわかったが、調査項目によって「どちらともいえない」と回答する学生が一定数いることも判明した。これが改善されたかどうかを見たい。なお、今年度は、2023 年度の新カリキュラム導入も見据え、メジャー制度に対する評価・改善点、新規設置科目調査、オンライン授業の課題・教育的効果等についても加える予定である。また、③については、昨年の自己点検評価結果からは予測できなかったことであるが、本年の文学部入試志願者数が 30%近く減少した。理由はコロナの感染が広がり受験生が地元志向になったなどの点が考えられるにせよ、受験生の望む学部カリキュラムになっているかどうか点検が必要となった。上記満足度調査を参考に 2023 年度よりのカリキュラム改革を考えたい。８回にわたる検討委員会とメジャー毎の各数回の分科会でメジャーの統廃合とダブル・メジャー体制の案が出ている。さらに、3 月末実施の新入生に対するプレイスメントテストの結果、新 1 年生の TOEIC スコアの平均点が数十点下がっていることが判明した。学部の SGU 語学スタンダード目標達成のためにも、AKADEMIA や本年スタートした留学準備プログラムを活用し英語力を伸ばすカリキュラムともしたい。

④ ポートフォリオの体系的活用について、DP の「６．学ぶことの意味を理解し、自律的学修者として、目標をもって自己の成長を図る」と関連づけて記述する。学習ポートフォリオが各科目ごとにポータルサイトにシステムとして設定されているが、この活用については学部としての組織的な取り組みが不十分であるため、初年次セミナー、文学部の学びとライフデザイン、演習等での取り組みを一層推進していく。また、秋学期の早い段階で、学部内でポートフォリオを体系的に活用している教員を中心とした学習会（FD 研修）を行い、学部教員にティーチングポートフォリオの作成を促すこととした。

⑤ 学部で作成した演習と卒業研究のルーブリックの使用結果について教員からアンケートをとり、改善を図ることとした。

⑥ 「成績評価に関する実態調査結果」は毎年、自己点検評価報告書に掲載し公表しているので、各教員が公表された内容を確認し改善するよう促すとともに、本年も各分野（メジャー）から科目を選びアセスメントを行うこととした。新しい成績基準が 3 年生まで適用されるので、B-以上の成績の増減について適切性を検討する。

【３】2021 年度の取組みの点検・評価と 2022 年度以降の方針

カリキュラムポリシーを 12 項目にわたり、体系的に定めて履修要項に明記している。これらの項目が掲げる目標が適切かつ体系的に達成されているかを点検するため、本年も学生に対するカリキュラム満足度調査を実施した。

まず 1 年次の必修科目である「初年次セミナー」、「人間学」は、満足度に関して 4(満足している)、5（とても満足している）の回答者が 7～8 割程度となっており、入学年度に関係なく、おおむね満足していることが分かった。しかし、3（どちらともいえない）と回答する学生も 2 割程度おり、今後もその要因の分析を改善のための取り組みを続ける必要がある。次に、これらの科目とその後の勉学との接合に関しては、4、5 と回答する学生の割合が満足度に比べて一律に低くなっている。特に 2018-2019 年度入学生は、「初年次セミナー」が現在のほかの勉学に役立っていると思うかという質問に対して 4、5 と回答したのが 5 割に満たない。これは同科目が学生の基礎的アカデミックスキル習得やメジャー選択にとって有効に機能していないことを示唆しており、少なくとも 3、4 年次の学生の半数以上にそのように思われていない現状は問題視しなければならない。また「人間学」についても、その後の勉学との接合に関する数値は満足度よりもやや劣る。「人間学」は、本学部のなかに存在する多様な専門領域に共通するエッセンスを学ぶための授業として位置づけられているので、さらに内容の充実を期すとともに、学生が同科目の理念や意義をより一層深められるための工夫をしていく必要がある。

次に、現行のメジャー制およびイントロダクトリー科目、ベーシック科目、アドバンスト科目の理解度・満足度に関しては、いずれも 4、5 との回答が 6 割を超えており、また 1（まったく満足していない）、2（満足していない）との回答は 5%前後であることから、おおむね学生の学力や希望に合致したものになっていると判断される。ただし、3 と回答する学生も一定の割合で存在する。これを 4、5 へと引き上げていくには、学生のニーズを吸い上げて新たなカリキュラムに反映させていくとともに、科目の授業内容の適正化や質の向上に努めていく必要がある。このうち学生のニーズに関しては、学生調査のなかで希望するカリキュラム・授業に関するアンケート（自由回答）を行い、心理、社会、文化、仏教、現代、文学、芸術、哲学、思想、表現といったキーワードへの関心が高いことが判明した。（別紙資料参考）2023 年度から始まる新カリキュラムでは、こうしたニーズに応えていけるよう、メジャー再編や科目新設の検討を進めている。

上述の問題点を改善するため、本年度よりカリキュラムの改訂作業を本格的に開始した。これは、2023 年度からの全学的な新カリキュラム導入に合わせたものでもある。現時点で、新カリキュラムの概要についてはほぼ固まりつつある。カリキュラム改訂のポイントは、次のとおりである。

（1）　学生に対して「多様な学びのあり方」を示すため、メジャーの数を 8 から 11 に増やすとともに、各メジャーの科目群の枠組みを従来よりも緩やかなものとし、学生がある程度の幅広い分野の科目を学べるようにする。

（2）　「文化」をキーワードとしてメジャーの再編を行う。「建学の精神」の一つである「新しき大文化建設の揺籃たれ」を具現化することこそが本学部の使命であるとの自覚に立ち、文化創造、異文化（多文化）交流・理解を促進させるためのカリキュラムを構築する。またこれは、学生調査に

おける「文化」への関心の高さに対応するための措置でもある。具体的には、言語教育が中心であった「異文化コミュニケーション」4 メジャー（英語・日本語・中国語・ロシア語）」を、言語とその背後にある文化的要素をともに学ぶことができるメジャーへと再編する（英語文化メジャー、国際日本学メジャー、中国・アジア文化メジャー、ロシア・ヨーロッパ文化メジャー）。

（3） 創価大学の長期ヴィジョンの中で掲げられている SDGs への取り組み、ダイヴァーシティ（多様性）の実現を推進していくメジャーとして、「多文化共生・平和創造メジャー」を新設する。同メジャーでは、異文化間の理解・コミュニケーションの促進、またそれによる「平和の文化」の創造、さらには「多文化共生」が重要なテーマになっている地域（地方）の創生の担い手を育成するため、学部のなかにあるリソースを結集した学際的教育を実施していく。

（4） 現在、選択者が最も多い社会学メジャー、表現文化メジャーのさらなる充実をはかる。社会学メジャーは、人類学の科目を増やし、「社会学・人類学メジャー」とする。人類学関連の科目は、他のメジャーの科目としても幅広く位置づけることが可能であるため、その増設は本学部のカリキュラム充実にとって非常に効果的である。また表現文化メジャーは、学生調査において抽出された「文学」「芸術」「表現」に関する実践的科目として、アドバンスト科目に「文芸創作特講」「演劇の理論と実践」を新設する。

（5） 日本語・英語・中国語・ロシア語の教育課程を有する本学部の特徴を生かし、言語学・言語コミュニケーション学、言語教育学を複数言語の比較を通じて学ぶことができるメジャーとして「言語文化メジャー」を新設し、「認知心理学」「心理統計とデータ分析」「文化記号論」などの科目を新たに設ける。「心理」「文化」に関する科目の充実は、前述のように学生からの要望も多い。理論言語学や複数言語の比較、言語教育理論、英語・国語科教育法などの学習を通じて、異文化理解、言語コミュニケーション、言語教育の知識と技能を身につけた学生の養成を目指す。同メジャーは、本学部の重要なミッションである英語教員・国語教育および公認日本語教師の養成においても中心的役割を担う。

（6） これまでの本学部 EMP コースをメジャー化する（名称は「AKADEMIA」）。本学の淵源である「創価教育」の理念を柱にして、哲学、人類学、社会学、平和学をベースとしながら、知恵、慈悲、勇気を持った価値創造者の養成を目指す。外国人留学生のほか、英語優秀層の日本人学生も取り込んでいく。また、海外の大学との科目連携も模索している。

（7） 必修科目である「初年次セミナー」（1 年次春学期）、「人間学」（1 年次春学期）、「文学部の学びとライフデザイン」（2 年次春学期）を学生の 3 年次以上のメジャー・演習の選択やキャリアデザインに接合させていくために、「人間学」を 1 年次秋学期に開講することとし、大学での学びのあり方（「初年次セミナー」）、本学部の教育理念と学びのエッセンス（「人間学」）、本学部での学びのあり方と自身の将来（進路）との関連性（「文学部の学びとライフデザイン」を段階的かつ連続的に学べるようにする。

（8） 社会学、文学、言語学、哲学、歴史学などの学問分野と、英語・日本語・中国語・ロシア語の言語教育分野の科目がある学部の特徴を生かして、その両方の習得を目指せるようダブルメジャー制、マイナー制を導入する。

（9） 学部学生の交流促進と学習効果の向上をはかるため、ピアサポート制度を導入する。そのた

めに「ピアサポート実践Ⅰ」「ピアサポート実践Ⅱ」を新設し、基礎的ソーシャルスキル・対人スキルの習得、本学部のカリキュラムの理念・しくみへの理解、サポート内容ごとの具体的スキル（英語・日本語学習のサポート、アクティブラーニングの推進・ファシリテートなど）に関する教育を行う。そして同科目の修得者を SA として雇用し、本学部の教育推進の協力者としていく。

以上のカリキュラム改訂により、本学部では従来よりも多様かつ柔軟で幅の広い教育プログラムが構築されることになる。また、学生自身が教職員や友人とのコミュニケーションを通じて自己への探求を深め、さまざまな選択肢のなかから自らの学びのあり方を選びとっていく、というメジャー制の教育の特徴をさらに強化していくことができる。この度のカリキュラム改訂は、平成 30 年 11 月 26 日の文部科学省中央教育審議の答申「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン」において（高等教育が目指すべき姿）とされた「基礎的で普遍的な知識・理解と汎用的な技能を持ち、その知識や技能を活用でき、ジレンマを克服することも含めたコミュニケーション能力を持ち、自律的に責任ある行動をとれる人材」を養成するための「個々人の可能性を最大限に伸長する教育」という方向性にも合致したものでもある。

今後は、学部全体のカリキュラムマップの作成、科目ナンバリングの見直し、各メジャーの科目群の決定と履修モデルの作成、各科目の内容の検討などの作業を行っていく。

〈今後の課題〉

学生の多くが入学後に自らの専門を選択するメジャー制では、学生一人一人に寄り添い、「学びのあり方」に関する相談を聞き、適切なアドバイスをするなどして、学生の自立的・自律的学びをサポートすることが極めて大切であるが、現状ではそのための組織的取り組みが十分に行われているとはいいがたい。本学部の教育目標の達成のためには、専門分野や教科内容の違いを越え、横断的視点で必要な人的・物的リソースを、外部のリソースも含めて効果的に組み合わせていくことが求められるが、それを推し進めていくうえで不可欠なカリキュラム・マネジメントの体制が整っていない。こうした現状の課題を克服するため、2022 年度には新カリキュラムに合わせた組織的なカリキュラム・マネジメント体制の構築や、教員間の情報・意識・教育スキルの共有化のための仕組みづくり（FD・SD の定期的開催と内容の充実など）に取り組んでいく計画である。さらに、新カリキュラムの充実した運用のためには、教職員の各種業務の合理化・効率化も必須である。本学部は、2007 年度の改組により 5 学科から 1 学科 7 専修の体制となり、2012 年度からメジャー制となったが、いまも 5 学科体制以来のセクショナリズムやそれにともなう非効率的な組織の運営形態や慣習が一部残存し（学部内に 7 つの学会が存在するなど）、それが教職員の負担を増やしている。後述するように、本学部（現在は 48 名で構成）は今後 4 年間で 20 名を超える教員が定年を迎えるため、そのあとを引き継ぐ現存の中堅・若手教員の一時的な職務負担の増大は避けられないが、学部運営の合理化・効率化によりそれを緩和し、その分だけ教育への注力を増やすことは可能である。こうした課題も、組織的なカリキュラム・マネジメント体制の構築によって克服していきたい。

なお、通信教育部でも 2023 年度に始まる通学部新カリキュラムに合わせて、2024 年度よりカリキュラムを改正する予定である。通学部新カリキュラムで設置するメジャーのうち、次のメジャーを開設して 5 メジャー制にする予定である。社会学・人類学メジャー、表現文化メジャー、歴史哲学メジャー、多文化共生・平和創造メジャー、日本語メジャー。通信教育部でのカリキュラム改正の細部につい

ては、2022 年度の検討課題である。

また、SGU の語学スタンダードの目標達成については、2018 年度以降、学部の目標にあと一歩届かない状況が続いていたが、コロナ禍で語学試験を受験する機会がなくなるなどの影響により、2021 年度の学部の目標値に対する達成率は 80%前後となる見込みである。さらに、3 月末実施の 2021 年度新入生に対するプレイスメントテストの結果、新 1 年生の TOEIC スコアの平均点が数十点下がっていることが判明した。ほとんどの学生が受験している TOEIC スコア（2018 年度～2021 年度）を学年別・スコア別（以下表 1 参照）に見てみると、3 年生以上の受験者数のうち約 10%が目標の 730 を獲得している。次に 630 以上の学生は 3 年生以上の全受験者数の 5～6%である。人数にすると 65 人となる。つまり、3 年生以上の学生の 630 以上の学生の英語力の向上が目標達成には必須であることがわかる。また、2 年生においては、730 以上の割合こそ少ないが、630 以上の割合が 5.6%であり 3 年生以上の割合と変わらない（20 名）。つまり、2 年生においても、630 以上の学生の英語力の向上が目標値達成の鍵となる。一方、1 年生においては、425 以下の学生が 80%を超えている。2 年生以上では 425 以下の学生の割合が約 50%であるのに比べ非常に大きな割合を占めていることがわかる。1 年生については、WLC と協力しながら、基礎から英語力をつけることと、自律した学習者になるためのサポート体制が必要である。今後の対策として、630 以上の学生を対象に英語で専門分野を学ぶ機会（EMP 科目の履修や AKADEMIA の活用）を増やすとともに、主に 2，3 年生を対象とした文学部生のための英語クラスを２つ設置する予定である（習熟度別クラス）。WLC での必修科目である English I-III の履修後に続く英語クラスとして、この文学部生のための英語クラスを設置したいと考えている。このクラスでは、それぞれの英語力における目標を明確にしたうえで、履修計画（EMP 科目などの履修）を一緒に考えるなど、英語力向上を目指す学生集団・コミュニティを形成していく予定である。具体的には、履修者には、それぞれの学生の英語力のレベルと関心に合わせて、次のような英語関連の科目の履修を推奨する。

Academic Writing A Ⅰ・Ⅱ、Academic Writing BⅠ・Ⅱ、英語翻訳入門、日英翻訳演習、英語通訳演習 A・B、英語翻訳論、Oral communication in English Ⅰ・Ⅱ

また、上級クラスの履修生には、次のような EMP 科目の履修を勧めて、英語力のさらなる充実と TOEIC スコアの向上を目指すとともに、文学・平和研究・文化の分野についての理解を英語で深めていく。

Literature Ⅰ・Ⅱ、Peace StudiesⅠ・Ⅱ、Cultural RepresentationⅠ・Ⅱ、Comparative Culture 英語で日本紹介Ⅰ・Ⅱ

この集団・コミュニティの中で学生たちが切磋琢磨しながら勉強を続けて結果を出すことを期待している。上記英語クラスの授業内容としては、八王子を訪れる外国人観光客のために、八王子市の浄瑠璃（車人形）の紹介や劇中のセリフの翻訳などにクラスで取り組むことや、文学作品の 1 節を学生たちが演じることで登場人物の動きや心情を深く理解することなども含めた文学部らしい英語の学びになるように現在検討中である。さらに、文学部生のための英語クラスと連携したピア・サポートプログラムを設置予定である。これは、主に３，４年生（英語上級者）の学生（SA）が自分たちの空き時間に 1，2 年生の英語学習を個別にサポートするプログラムである。個々の学生に応じた目標や学習方法を一緒に考え、励まし合いながら長期的に学習を進めていく。その中で、TOEIC スコア 730 を目指す学生のコミュニティや基礎力向上を目指す学生のコミュニティ、あるいは外国語資格試験別対策用のコミュニティを作ることで、スコアを伸ばすことと、共に学ぶ仲間とともに自分たちの夢や目標に向か

って成長していくことを期待している。2022 年度の試行期間ののち、2023 年度秋学期から本格運用を予定している。

表１．2021 年度　TOEIC-IP 学年別・スコア別分布表				
TOEIC	4 年以上	3 年生	2 年生	1 年生
730 以上	12% （60 名）	10.3% （38 名）	4.2% （15 名）	1.5% （5 名）
630 以上	7.8% （39 名）	6.8% （25 名）	5.6% （20 名）	1.5% （5 名）
530 以上	10.4% （52 名）	13.2% （49 名）	14.6% （52 名）	4.2% （14 名）
430 以上	24.3% （122 名）	21.9% （81 名）	22.5% （80 名）	10.6% （35 名）
425 以下	45.6% （229 名）	47.8% （177 名）	53.1% （189 名）	82.1% （271 名）

今後の課題としては、文学部生のための英語クラスやピア・サポートプログラムを運営するだけでなく、学部全体の取り組みとして英語力の向上を目指すにはどのような意識改革や工夫が必要かについて学部内で議論していく必要がある。また、継続的に外国語試験を受験することを学生たちに意識づけするための工夫も必要となるだろう。この点については、WLC と連携して、文学部の取り組みとして学生に周知していく必要があるだろう。

次にポートフォリオの活用については、初年次セミナーにおいて「学生生活ポートフォリオ」の活用方法を示すなかで、卒業後のキャリアを想定した在学中の行動計画を考えるワークを行っている。目標から逆算して時系列で到達目標を考えることだけでなく、現在、関心のあること、できることからめざすべき方向を考えるボトムアップの方法も示し、「セメスター目標」を設定できるように指導している。

このようなポートフォリオを使ったワークは、学生が文学部で学ぶことの利点を自覚させ、それを目標達成にどう活用するか、また、その利点を使って何をしたいかというように、主体的に学習目標を決めていくことに相応の効果を果たしている。ただ、コロナ過で、未来が見通せない状況の中で、学生はセメスター目標や 4 年間計画などが立てにくい現実があり、今後のポートフォリオの活用がよりよくできるよう工夫が必要である。

また、学生の具体的な学習成果を蓄積するポートフォリオは、ポータルサイト・システム上に各履修科目ごとに「科目ポートフォリオ」として設定されているが、学生がこのシステムを十分に活用しているとはいえない現状である。ポートフォリオを活用して学生の自律的学修をすすめ、その学習成果を自己認識できるようにするための方法を検討していきたい。

「科目ポートフォリオ」については初年次セミナーなどで活用の呼び掛けをしているものの、あくまでも学生の主体的な取り組みにかかわることであり、使用率は高くない。成績評価のための資料とすることで学生が活用することが期待されるが、そのためには、教員の成績評価を効率的かつ適切な

ものとなる活用方法の開発と教員の理解が必要となる。現在、ルーブリックの導入など成績評価の改善の取り組みを進めているが、こうした成績評価改善の一環として「科目ポートフォリオ」の活用方法の開発を行い、年度内にパイロット科目を選定して活用事例を例示できるように取り組んでいく。

このような取り組みとあわせて、現在、パイロット・ケースを進めている「ティーチング・ポートフォリオ」の作成効果を検討する研究会（FD 研修）を開催し、教員自身がポートフォリオを作成することで自らの教育理念の確立とその具現化のための実践方法の開発に取り組むこととした。文学部として 2021 年度秋学期に 1 度研究会を開催し、3 名の教員が試案を発表した。今後定期的に開催し、よいモデルを作っていきたい。全学としても、本年をスタートに、3 年に一度全教員がティーチング・ポートフォリオを作成し全学 FD・SD 委員会に提出することになった（文学部では現在 5 名が執筆中）。教員のこの姿勢が学生たちのポート・フォリオ作成の促進につながると考えたい。

次に、演習と卒論のルーブリックについては、演習および卒業論文研究が大学全体の成績評価上限（Cap 制）除外科目になっていることから、絶対評価を前提とする独自の成績評価基準として、以下のルーブリックを定めている。卒業論文研究Ⅰ・Ⅱと演習Ⅲ・Ⅳについては正式には 2022 年度からの運用であるが、本 21 年度は卒業論文研究Ⅱについても試験的に運用した。

演習評価のためのルーブリック
2

評価項目	4((s/A)	3(B)	2(C)	1(D)	0(E)
(1)予習・復習課題への取り組み	毎回の予習・復習課題にとてもよく取り組でいる。	……	毎回の予習・復習課題に取り組まないことが時々ある。	……	毎回の予習・復習課題にほとんど取り組んでいない。
(2)ゼミへの参加状況	毎回のゼミに出席し、質疑応答やディスカッションを積極的にリードしている。	……	出席要件は満たしているが、質疑応答やディスカッションの積極性に欠ける。	……	出席要件を満たしておらず、質疑応答やディスカッションにもほとんど参加していない。
(3)プレゼンテーション	プレゼンテーションの論理性・表現・方法など、内容・形式ともに優れており、質問にも的確に答え、議論のためのいい問題提起ができている。	……	プレゼンテーションの論理性・表現・方法など、内容・形式が不十分であり、質問への答えも不十分で、議論のための問題提起も不十分である。	……	プレゼンテーションの論理性・表現・方法など、内容・形式ともに不適切であり、質問にもほとんど答えられず、議論のための問題提起ができていない。
(4)ゼミの一員としての態度・志向性	ゼミの目標達成に向けて他のメンバーと積極的に協力し、リーダーシップを発揮している。	……	ゼミの目標達成に向けて他のメンバーと協力する姿勢やコミュニケーションが不十分である。	……	ゼミの目標達成に向けて他のメンバーと協力する姿勢に欠け、コミュニケーションもはかれていない。
総合評価	毎回のゼミの取り組みに積極的に参画し、優れた能力を発揮している。	……	ゼミの取り組みへの参画が不十分であり、能力の発揮も不十分である。	……	ゼミの取り組みへの参画が非常に弱く、能力が発揮できていない。

卒業論文評価のためのルーブリック
2

評価項目	4(s/A)	3(B)	2(C)	1(D)	0(E)
(1)問題関心とテーマ設定	問題関心が明確で、それに基づくテーマ設定も具体的で、独自性がある。	……	問題関心に不明確な部分があり、それに基づくテーマ設定にも曖昧な部分がある。	……	問題関心が不明確であり、テーマ設定も不適切である。
(2)先行研究の渉猟と整理	必要十分な先行研究を渉猟し、よく整理している。	……	先行研究の渉猟が不十分であり、あまり整理していない。	……	先行研究の渉猟をほとんど行っていない。
(3)必要なデータ(自らのアンケート・インタビュー等を含む)の収集と分析	自ら調査するなど、必要なデータを収集し、よく分析している。	……	必要なデータの収集と分析がともに不十分である。	……	必要なデータの収集と分析をほとんど行なっていない。
(4)論理展開と考察	論旨がよく通っており、考察に独創性がある。	……	論旨の通りがスムーズでなく、考察も不十分である。	……	論旨の通りが悪く、考察をほとんど行なっていない。
(5)文章表現・文字、図表、引用・参考文献等の表記	文章表現が適切であり、誤字・脱字がなく、図表や引用・参考文献等の表記も適切である。	……	文章表現に不適切な部分があり、誤字・脱字も少々あり、図表や引用・参考文献等の表記にも不適切な部分がある。	……	文章表現が稚拙で不適切な箇所が多く、誤字・脱字も多くあり、図表や引用・参考文献等の表記も不適切である。
総合評価	内容・形式ともに優れ、卒業論文として相応しい。	……	内容・形式ともに不十分な部分があり、卒業論文としての標準に達していない。	……	内容・形式ともに不適切であり、卒業論文としての要件を満たしていない。
*メジャーによっては、(2)と(3)を分けず、一体のものとして評価してよい。					

実際に運用した演習Ⅰ・Ⅱのうち、秋学期の演習Ⅱ、そして同じく秋学期に試験的に運用した卒業論文研究Ⅱの成績評価結果を示すと以下とおりである。まず演習Ⅱについて同学期に開講された 42 のゼミの履修学生の実数を成績区分ごとに示すと表のとおりである。

S	A+	A	A−	B+	B	B−	C+	C	D+	D	E+	E	N	履修者合計/人
14	98	141	46	37	29	8	2	5	2	4	0	1	2	389

次に卒業論文研究Ⅱ合計 44 件についても同様に実人数で示すと以下のとおりである。

S	A+	A	A−	B+	B	B−	C+	C	D+	D	E+	E	N	履修者合計/人
107		196			84			11		2		0	11	411

まず演習Ⅱでは、本来 30%までの成績上限のある旧制度の S、A 評価と、本来 25%の成績上限のある A+、A　、A-評価両方の合計は、299 で、全体の 76.9%であり、大きく上回っている。因みにすべて S 評価または A+評価だったゼミは２件（合計実人数６）であった。

また卒業論文研究Ⅱはすべて旧制度での成績評価であるが、S,A 評価の合計は 303 で、全体の 73.4%である。そのうち、すべて S 評価のゼミが 3 件（合計実人数 10）、また S 評価が A 評価を宇上回ったゼミはこれにプラスして５件（合計の実人数は S 評価 33、A 評価 17 であった。実際にこのルーブリックを何人のゼミ・卒論担当教員が用いたか全体は把握できていないが、用いたかどうか、用いてどうであったかのアンケートに答えてくれた 12 名の教員の回答をまとめると次のとおりである。

	ルーブリック使用	不使用	一部使用
演習Ⅱ	10	1	1
卒業論文研究Ⅱ	10	2	0

そのうえで、アンケートで寄せられた感想や意見・改善策の提案をまとめると次のとおりである。まず有益だったという意見として

・各項目は、非常に具体的で使いやすく、有益な評価項目だと思う。

・評価項目と成績の関係がわかりやすく、使いやすかった。

・演習と卒業論文の評価の際、明確な目安としてあると評価しやすい。また、採点の際だけでなく、授業設計の面でもより明確な目安として参考になる。

・学生にも公開して学修の目標にしてもらうといい。

・演習ルーブリックについては、メンタルやさまざまな状況をかかえている学生は個別に評価せざるをえないが、使用する価値があると思う。

・ルーブリックの適用により、改めて評価における主観性と客観性の要素について再考させられ、有益だった。

・演習では予習の状況については把握できるが、復習についてはどの程度行っているのか把握が難しい。

・ゼミの指導の過程を知らない副査が客観的に判断するための基準ならば有効であり、指導なしに学生に書かせた論文を評価する場合でも有効である一方、指導する側にとっては指導上の、学生にとっては評価を得る上での指標として機能すると思われる。

一方で、使いにくい、改善が必要などの意見も多く寄せられた

・ルーブリックの必要性やねらいは分かるし基準も妥当だと思うが、現時点では非常に使いにくい。文学部全体で、演習や卒論の評価をどう考えるのか、講義科目と同様に厳密な評価を行うのか、話し合って認識を統一させたほうがいい。少なくとも履修要項あるいは「文学部での学び方」にルーブリックを明記し、入学時から演習・卒論の評価について理解してもらう必要がある。

・演習については、現状では予習への取り組みは把握できるが、復習への取り組みが把握しにくい。今後復習への取り組み促進に工夫が必要である。

・卒論のルーブリック自体はよく練られていると思うが、現状の学生の学力（卒論執筆能力）に適用するのは難しい。

・「質疑応答やディスカッションを積極的にリードしている」かは、必ずしも発言回数の多さと比例しない場合もあり、評価に際して常に悩むところである。

・卒論ルーブリックの「テーマ設定の独自性」は、教員の助言を積極的に求め、受け入れる学生は多くの場合、適切で時に独創的なものになり、結果的に高評価になりやすいため、そうした積極性も評価対象に加えてよいと思う。

・不使用の理由は、ルーブリックをそのまま当てはめると、ほとんどの学生が「C以下」になるためである。
・ゼミは少人数なので、例年学生が一生懸命取り組んでおり、S と A 評価で悩む。ルーブリックにも S と A の違いの記述があるといい。
・「ゼミへの参加状況」の項目は、出席や積極的態度を評価している項目と思われるため、「プレゼンテーション」の項目名と内容を広げて、プレゼンテーション以外の取り組みの質、発言、やり取りにおける質も評価対象とするのはどうだろうか。
・卒論に対しては意欲的なゼミ生たちが多く、3 年次から卒論を意識して取り組んでおり、ほぼ S,A 評価となり、最低でも B 評価である。「国内外の先行研究を把握し、整理して説明できる」という点も評価項目に含めたい。
・予復習というより、学生自身の研究、および発表とその準備への取り組みを重視している
・積極的に参加し、発言していることを重視しており、全体をリードしているかどうかは重視していない。
・リーダーシップのある学生が、必ずしも最も良く理解し研究を進めているとは限らないし、ゼミには様々な個性が集まり、そうした一人一人を重視する必要性がある。
・単に資料を整理しているだけでは、学生がよく理解しているとは判断でない。剽窃がないか、信頼するに当たらないネット上の資料を取り上げたり、ネット上の解説を引用したりしていないか、なども検討すべきかと思う。
・論旨の明快さと考察の独創性は必ずしも同じ基準では計れないように思われる。
・卒論の「独自性」という項目はの先行研究の渉猟・整理とそれらに対する独自性としたほうがいい。
・ルーブリックの項目をどんなに考えて作り上げても、各項目内での評価については、ともすると恣意的に流れてしまいがちで、そうならないような実行体制などの工夫が必要である。
・卒論の場合は各学生と長い期間をかけてテーマ設定について話し合いながら方向性を決めてきましたので、僅かな例を除いて、殆どの学生ついて最高点の 4 を付けざるを得ない。
・卒論は各学生に何回かプレゼン等させて論理展開や考察の仕方について話し合いをしながら書かせてきているので、多くの学生に一応 4 か 3 かを付けたものの、4 とするか 3 とするか根拠を見出すのに苦労している。
・卒論は、多くの学生の卒論を求めに応じて添削等しているので、とんでもなくおかしな表現や出典の示し損ない等は少なく、例外的なものを除くと、殆ど差をつけられない。そのため、各項目の点数を合計したものは、僅かな例外を除けば、自ずと僅差のものばかりとなり、結果として、ルーブリックによる評価作業に取り掛かる前に考えていた評価と比べると、高評価のものが増えることになっている。
今後はこれらの感想や意見を踏まえつつ、さらにアンケート等で実態を把握しながら、何のための評価基準なのかを含めて、学部として演習と卒論における学修の目的・進め方・評価等について、常設化する予定のカリキュラム委員会や学部の FD フォーラム、教員懇談会などを通じてコンセンサスを得ていく必要がある。

次に、「成績評価に関する実態調査結果」については、本 2021 年度は、昨年に引き続き、教育課程及びその内容・方法の適切性を７つのアセスメント項目（＝７つのラーニング・アウトカムズ項目※①）について現状分析を行った。扱った 28 のアセスメント科目は、９つのメジャー・専修の基幹科目であり、それらをカリキュラム・マップ（※②）にしたがって７つのアセスメント項目別に分け、過去 3 年間の成績の推移とそれらの科目の授業アンケートにおける「到達目標」の達成度の推移を点検・評価することとした。なお、過去 3 年間の成績の推移についてはＢ－評価以上の推移を中心に点検した。理由は、シラバスの「到達目標」の達成と成績評価の関連について全学共通に「現実的かつチャレンジングな目標」としてＢ－評価以上を「到達目標」の「達成」としていること、およびＢ－以上にあたる評価については成績評価の厳格化の観点から、原則として両評価の合計を履修者の 30%以内とするキャップ制を採用しているからである。また授業アンケートを用いることについては、教員からみた客観的評価と学生から見た主観的評価の比較に一定の意味があると考えるからである。これらの点検によって、２つの推移の原因を探り、学部としての今後の授業改善につなげたいと考えるからである。その他、中国語等の第 2 外国語の語学能力試験の成果による言語能力の伸長度の測定と分析（TOEIC のスコアの伸長度の測定と傾向分析は昨年度に行った）や各種免許・資格の取得状況に基づく学修成果の達成状況を分析した。海外研修参加者・留学学生へのアンケートと分析は、コロナ禍にあったため行わなかった。

以上のアセスメント・ポリシーと実行計画を一覧にすると以下のとおりである。（●印の科目は、担当教員の変更があった等により、本年度はアンケートを実施しなかった科目である）。

＜ラーニングアウトカムズ　アセスメントプラン＞

アセスメント項目	アセスメント指標	アセスメント対応科目（パイロット科目）
（１）人間と社会と文化に関する基礎的教養と専門的学術を修得し、諸事象を精確に理解し、鑑賞し、評価することができる。	履修科目の到達度(成績) 卒業論文の完成度（4 年次） 教員採用試験（社会・地歴・公民）の合格者数	文学研究法入門Ⅰ、英米文学概論Ⅰ 社会学概論、歴史学概論●、社会福祉入門 日本語学概論Ⅰ 東洋文化史Ⅰ●
（２）母語および外国語を用いて、的確で豊かな自己表現とコミュニケーションを行うことができる。	語学系履修科目の到達度（成績） TOEIC 等のスコア、中国語等の第 2 外国語語学能力試験 教採試験の合格者数（英語・国語）	Oral Communication in English Ⅰ● 日本語教育概論Ⅰ● 中国社会文化論Ⅰ Academic Writing AⅠ
（３）基礎的・専門的学知に基づいて、新しい知識と表現を創造することができる。	履修科目の到達度（成績） 卒業論文の完成度（4 年次）	日本文学概論Ⅰ、英語学概論Ⅰ、演劇論 日本文学史、社会福祉概論Ⅰ

（4）論理的に思考し、適切な方法で情報の取得と処理を行い、物事の的確な判断ができる。	履修科目の到達度（成績） 就業力判定テスト（1 年次後期・3 年次後期・4 年次後期）	ジャーナリズムの社会学Ⅰ●、論理学Ⅰ● 社会調査の基礎、メディアと社会心理Ⅰ●
（5）文化の多様性を尊重しつつ、世界市民として、生命の尊厳と平和を志向する。	履修科目 海外研修参加者・留学学生へのアンケート（研修終了後、留学からの復学時）	比較文化Ⅰ、倫理学概論Ⅰ、国際社会論 東欧の歴史と文化●、比較文化史概論
（6）学ぶことの意味を理解し、自律的学修者として、目標をもって自己の成長を図る。	初年次セミナーの到達度（学び始めルーブリック・リフレクションシート） 文学部の学びとライフデザインの到達度（アンケート）	
（7）人間主義の社会に向かって、他者と協力する姿勢やリーダーシップを発揮する。	履修科目到達度　人間学の到達度（授業アンケート当該項目） 初年次セミナー到達度（学び始めルーブリック・リフレクションシート） 文学部の学びとライフデザイン到達度（アンケート）　社会福祉士国家試験合格者数	平和学、ジェンダーの社会学●、児童福祉論Ⅰ 人間の安全保障

なお、本学部の通信教育課程は 2018 年に開設し、本年度卒業生を出す予定である。したがって、現在の教育課程およびその内容や方法の適切性の点検や評価を総合的に行うのは、来年度以降としたい。なお、完成年度を迎えた 2022 年以降、通学課程のカリキュラム改善への取り組みを通信教育課程にも反映させていく予定である。しかし、通学課程と同様に、カリキュラム上の改善を迅速に行うことも重要で，今後はもう少し短い期間での定期的な検証にもとづいて必要な改善への取り組みを行なうために、カリキュラムの検討を随時行うことが望まれる。人間と社会と文化についての広い教養と深い専門的学術の修得など、学位授与方針の中で学修成果として示している 7 項目を身につけるために、文学部が教育課程の編成・実施方針として設定したのがメジャー制である。科目に段階的なレベルを設け、イントロダクトリー科目は 6 単位以上修得することを設定して、専門領域に偏ることない教養を学修できるようにしてある。また、大学が外国語科目として要求する第 1 外国語 6 単位と第 2 外国語 4 単位に加えてグローバル科目 2 単位の修得を課す他、独自に語学関係科目と EMP 科目を多く開講することによって、カリキュラム・ポリシーに基づく語学教育の充実も図っている。

さて、基幹科目の各教員に自己点検を依頼し、点検を持続することを通して、各教員に教育改善への

自覚が生まれているが、本年度も、コロナ禍にあって、従来とは異なる授業体制が必要となったが、予習動画の導入や、復習動画の視聴などを通して、一定程度は学習成果の維持が可能となった。例えば、「予習動画は復習にも活用できることから、到達目標達成度５「90%以上」の増加につながったと考えられる」（倫理学概論）といったコメントや、「毎回のリアクションペーパーの学生の記述から、オンライン授業におけるチャットの導入による効果と推論できる」（社会学概論）などのコメントがあった。

今後の課題として、こうした調査を基幹科目以外にも広げて、全学部的な取り組みとして行うことが必要だと考える。具体的な案として、各教員のもっとも受講人数の多い科目１科目について、２年に１度のペースで調査を行う方針を検討中である。

次に各アセスメント項目ごとの現状についてしるす。

①アセスメント項目（１）

＜人間と社会と文化に関する基礎的教養と専門的学術を修得し、諸事象を精確に理解し、鑑賞し、評価することができる。＞

○アセスメント指標１：履修科目の成績と授業アンケートの「到達目標」の達成度

対応科目とした５科目では、B－評価以上の達成率が５～８割とばらついている。特に５割となった「東洋文化史」は、年度ごとのばらつきも大きい。担当教員が交替したりしたこともあったので、評価について調査を進めたい。ただし、全体が６割以上であることを勘案すると、対応科目全体としては、おおむね十分な教育と適正な評価がなされていると考える。

科目名	年度	B－以上	履修者数	科目名	年度	B－以上	履修者数
英米文学概論Ⅰ	2019	86.8%	144	文学研究法入門Ⅰ	2018		
	2020	88.6%	105		2019	84.80%	46
	2021	80.9%	115		2020	84.60%	78
日本語学概論Ⅰ	2019	58.8%	34	歴史学概論	2018	75.6%	123
	2020	79.3%	58		2019	69.1%	55
	2021	72.7%	33		2020	78.4%	51
社会福祉入門	2019	49.3%	36	社会学概論	2018	79.10%	110
	2020	75.9%	43		2019	80.00%	170
	2021	62.4%	40		2020	74.40%	308
				東洋文化史Ⅰ	2018	52.3%	44
					2019	80.0%	15
					2020	50.0%	32

（成績に関する教務部資料より作成）

《科目の自己点検評価の例》　（資料：「担当科目自己点検のためのコメント」より）

「社会福祉入門」

①B－評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等

B－評価の年次推移は、２０１９年度 23.6%・２０２０年度 36.1%・２０２１年度 36.5%となってお

り、順調に B ランクが増加していると考えられる。具体的なとしくみとしては、時事ネタを取り入れ身近な課題（コロナによる収入減少→生活保護や若い世代の困窮・少子高齢社会と社会システムとの関係）から導入するよう心がけ、社会生活に必要な用語（福祉に関する専門用語）についての資料などの作配布を行った。また、社会福祉学専修用に運用している研究室の E-learning を「社会福祉入門」履修生にも公開した効果も一因として考えられる。

「英米文学概論Ｉ」

①B－評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等

B－評価等の増減に関する振り返りにあたって（１）履修者数と（２）2007～2018 年度入学生と 2019 年度以降入学生用の評価に分け、コメント等の記述を試みる。（１）履修者数 ［2019 年度］（履修者合計１５３名）、 「2020 年度」（履修者合計１０９名）、「2021 年度」（履修者合計１１６名）。（２） 「S と A 評価の合計」（2007～2018 年度入学生対象）あるいは「A－～A＋評価の合計」（2019 年度以降入学生対象）について ［2019 年度］が 28.1%、2019～は非履修年度。「2020 年度」が 25.6%あるいは 33.3%、「2021 年度」が 20%あるいは 28.8%と概ね 30%前後で安定している。「B－評価」あるいは「B－～B＋評価の合計」については、［2019 年度］が 56.9%、「2020 年度」が 53.5%あるいは 60.6%、「2021 年度」が 26.7%あるいは 56,5%と「2020 年度」にやや増加傾向がみられるものの、概ね５割～６割の水準で推移している。「2021 年度」の「B－評価」のみが 26.7%と低いが、これは 2007～2018 年度入学の受講生数そのものが全１１６名中１５名と卒業に伴い、減少していることにも起因していると思われる。（３）今後の授業改善への取り組み・問題点等　これまで授業改善への取り組みとして、授業内容に関連するプレゼンとそれに基づくディスカッション、あるいは事前の記述式課題の紹介と講評、それに基づくディスカッションといった受講生主体のアクティブラーニングを重視してきたが、今後もさらに質の高い内容を目指すとともに講義全体のメニューの消化と理解にも努めたい。

②授業の到達目標の達成度の推移に関するコメント（授業改善との関係など）

「あなたはシラバスに書いてある到達目標をどの程度達成できたと思いますか」の項目の数値（%）の推移としては、２０１９年度→２０２０年度→２０２１年度の順に記述する。３「70～79%」を選択した割合が 27.9%→20.0%→35.7%、４「80～89%」を選択した割合が 44.2%→45.0%→27.1%、５「90%以上」を選択した割合が 20.8%→20.0%→7.1%であり、全体的に見ると、４は微増の後、減少、５がほぼ横ばいの後、減少傾向となった。３年間の内、２０２１年度が達成度の数値が下がったが、考えられる要因としては、予想以上にプレゼンの希望者が多く、当初予定していた授業内容が時間的に十分消化できなかったことが挙げられる。授業改善の取組としては、まず講義全体のメニューと受講生主体のアクティブラーニングの両立のために、今後、更に効果的な事前学習の機会を増やすことが必要になるかと考えている。さらに授業時における質問用のミニットペーパーの活用等も活用していきたいと思う。

③その他（データを見て感じられる点、改善点など）　＊ご記入は自由です。

新型コロナウイルス対策で、海外からの受講生等にも配慮し、同時に対面授業とオンライン授業を組み合わせた形式の授業を体験し、非常に勉強になった。今後も可能性はあると思われるので、メリット

を生かし工夫しつつ授業内容の改善に努めたい。

②アセスメント項目（２）

＜母語および外国語を用いて、的確で豊かな自己表現とコミュニケーションを行うことができる＞

○アセスメント指標１：語学系履修科目の成績と授業アンケートの「到達目標」の達成度

対応科目とした４科目では、B－評価以上の達成率が８割を超えており、おおむね達成できている。「中国社会文化論Ⅰ」はここ数年で確実に改善が見られる。

科目名	年度	B－以上	履修者数	科目名	年度	B－以上	履修者数
Oral Communication Ⅰ	2019	87.0%	69	中国社会文化論Ⅰ	2019	54.2%	24
	2020	86.0%	50		2020	79.4%	34
	2021	92.2%	51		2021	95.0%	20
日本語教育概論Ⅰ	2019	87.5%	24	Academic Writing Ⅰ	2019	69.0%	71
	2020	80.8%	26		2020	90.4%	52
	2021	84.0%	25		2021	92.1%	63

（成績に関する教務部資料より作成）

《科目の自己点検評価の例》　（資料：「担当科目自己点検のためのコメント」より）

「Academic Writing Ⅰ」

①B－評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等

この科目は、過去３年間(2019-2021 年度)において、B－以上の学生数が、95-100%で推移している。書くという授業内容の特性上、20 名程度の演習形式で授業を行っており、例年、受講生は、毎回の課題に真摯に取り組んで、クラスメイトとのやり取りに臨んでいる。アクティブラーニングを多く入れながら、学生が効果的な英語表現を用いて、結束性・一貫性をもつ文章を書くことができるよう指導を心がけた。

②授業の到達目標の達成度の推移に関するコメント（授業改善との関係など）

受講生の振り返りで、到達目標を 80%以上達成したと回答した学生は、過去３年間で、84.2%（2019 年度)、75.0%（2020 年度)、84.2%（2021 年度)のように推移している。このことは、シラバスの到達目標を学生と共有して、指導の中でも目的と目標が何であるかを学生と共有したことによると思われる。今後、目標達成度がさらに上がるよう、学生一人一人に目の届く、きめ細かな指導をしていきたい。

「中国社会文化論Ⅰ」

②授業の到達目標の達成度の推移に関するコメント（授業改善との関係など）

「あなたはシラバスに書いてある到達目標をどの程度達成できたといますか」の項目の数値（%）の推移は、「4.83」「4.88」「4.76」である。グループワークの際に、事前学習も発表してもらっている。毎回の事前学習の課題を到達目標を意識して、出来るだけ明確に予告していたことも関連しているように思える。

○アセスメント指標２：教員採用試験（英語・国語・社会）の合格者数

社会・地歴・公民の教員採用試験は難関であり、人間と社会と文化に関する幅広い基礎的教養と深い専門性が求められる。この試験の合格者数はアセスメント項目（１）の点検に資すると考え、アセスメント指標とした。

まず、毎年の途中取り消しを除いた 4 年次段階の文学部教職課程登録数は 30～40 名程度で、教採受験者数は 20 名程度（2021 年度は 16 名）、現役合格数は１０名程度である。2021 年度の合格者数は、英語・国語・社会（または地歴・公民）を合わせて、14 名（現役 8、卒業生 6）であった。

学部の取り組みとしては、教職志望者のための大会を年 2 回開催している。第 1 回（7 月）は現役教員の本学部卒業生を招いて教育現場の仕事内容やアドバイスをお願いし、第 2 回（11 月）は教採合格者の体験・活動報告や質問会を行い、どちらの回も教職キャリアセンター職員によるアドバイスを行なうなどして志望者をサポートしている。

教採合格者の声として、教採受験生が懇談したり自習できる部屋が与えられているが、やや遠いため、中央教育棟にもあるとより一層よいということであった。

〇アセスメント指標３：第 2 外国語のスコア

③アセスメント項目(3)

＜基礎的・専門的学知に基づいて、新しい知識と表現を創造することができる。＞

〇アセスメント指標１：履修科目の成績と授業アンケートの「到達目標」の達成度

対応科目（パイロット）とした５科目では、B－評価以上の達成率６～８割台であり、６割台の科目にはさらなる改善が求められる。「社会福祉概論Ⅰ」と「日本文学概論Ⅰ」は改善傾向にある。「英語学概論Ⅰ」は履修者が半減し、それに伴ってかB－以上も一昨年レベルにまで落ちた。その点についての担当科目者による自己点検が促される。

科目名	年度	B－以上	履修者数	科目名	年度	B－以上	履修者数
英語学概論Ⅰ	2019	65.0%	60	日本文学史	2018	72.4%	29
	2020	80.5%	41		2019	34.4%	128
	2021	80.5%	41		2020	65.0%	123
社会福祉概論Ⅰ	2019	86.1%	36	演劇論	2018	78.7%	202
	2020	86.0%	43		2019	81.6%	136
	2021	90.0%	40		2020	80.9%	47
日本文学概論Ⅰ	2019	83.6%	73				
	2020	81.8%	99				
	2021	78.4%	125				

（成績に関する教務部資料より作成）

《科目の自己点検評価の例》　（資料：「担当科目自己点検のためのコメント」より）

「社会福祉概論Ⅰ」

①B－評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等

B－評価の年次推移は、２０１９年度 44.4%・２０２０年度 51.2%・２０２１年度 27.55%となっている。

2020 年度に比べ 2021 年度の B ランクが減少している理由としては、厚生労働省の社会福祉士養成カリキュラムの変更に伴い、旧カリキュラムと新カリキュラム混在の講義内容であった。また国家試験における当該科目の出題傾向の変化への対応を行った結果、単位認定試験の難度が前年度に比べ上がったためと考えられる。次年度以降は新カリキュラムのみの運用となり改善できるのではないかと考える。また、筒井研究室運用の E-learning において、講義資料やカリキュラムの変更点など確認できるようにして復習可能に状態にしている。

②授業の到達目標の達成度の推移に関するコメント（授業改善との関係など）

本科目は社会福祉士国家試験指定科目であるため、国家試験において当該科目において合格点をとれるだけの知識を習得しているレベルを C 評価としており、B－評価は知識レベルにおいて 8～9 割を理解しているもの、A 評価は現場で活用できる SKILL（発表・報告書の完成度）の習熟度で判定を行っている。

国家試験の合格基準はこれまで 6 割程度とされてきたが、昨年の国家試験において当該科目の出題傾向の変化（考える問題の増加）とともに 6 割では合格が確約できない事例が認められため、単位認定試験についての知識レベル評価を変更を行い厳しく評価したため B－評価が減少したと考えられる。

③その他（データを見て感じられる点、改善点など）＊ご記入は自由です。

A 評価が絶対評価ではなく、相対評価になっているため成績評価が行いにくい。特に通年科目の場合、「社会福祉の原理と政策１」「社会福祉概論１」などのイントロダクション科目は国家試験をパスできるよう、知識レベルの習得に趣を置いているため差が出にくい傾向にあるため、到達目標が達成されている学生には A 評価を制限なしにつけてあげられるよう変更してほしい。

「日本文学史」

①B－評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等

2021 年度は前年度に引き続き全面オンライン講義であった。前年度はオンデマンド方式での開講であったが 2021 年度はリアルタイムオンラインとその録画・録音を配信する方式で行った。対面授業に比べて、事前教材の配信や事後の課題、またオンライン講義中における復習テストや各種アプリ利用によるアクティブラーニングの工夫等により B－評価が増加傾向にある。

②授業の到達目標の達成度の推移に関するコメント（授業改善との関係など）

事前配信資料や事後学習課題の充実により、オンライン講義に切り替わって以降の到達目標の達成度はおおむね良好に推移している。

④アセスメント項目(4)

＜論理的に思考し、適切な方法で情報の取得と処理を行い、物事の的確な判断ができる。＞

○アセスメント指標１：語学系履修科目の成績と授業アンケートの「到達目標」の達成度

対応科目（パイロット）における B－評価以上の達成率とその推移は科目ごとで異なるが、極端に低

い年度も改善がなされていて、アセスメントを実施することによって自覚されてきていると考えたい。なお、「ジャーナリズムの社会学」「論理学」は、担当教員が交替していて、そうした担当者の交替も要因と思われる。また、「メディアと社会心理Ⅰ」は2021年度に新任の教員が担当したため、アセスメントを行っていない。

科目名	年度	B－以上	履修者数	科目名	年度	B－以上	履修者数
ジャーナリズムの社会学 Ⅰ	2019	54.8%	42	論理学Ⅰ	2019	61.30%	31
	2020	68.3%	41		2020	37.30%	75
	2021	84.4%	45		2021	84.60%	26
メディアと社会心理 Ⅰ	2019		―	社会調査の基礎	2018	54.2%	144
	2020	87.5%	240		2019	59.3%	108
	2021		―		2020	61.7%	94

（成績に関する教務部資料より作成）

《科目の自己点検評価の例》　（資料：「担当科目自己点検のためのコメント」より）

「社会調査の基礎」

①B－評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等

2018年度は、B－評価は履修者142人中31名で21.8%であった。2019年度はB－評価は履修者108人中37名で34.3%、このうち2018年度以前入学者では履修者61人中20名で32.8%、2019年度入学生では47人中17名で36.2%であった。2020年度はB－評価は履修者93人中34名で36.6%、そのうち2018年度以前入学者では履修者17人中3名で17.6%、2019年度以降入学生76人中31名で40.8%であった。B－評価はやや増加傾向を見せているように感じられる。

②授業の到達目標の達成度の推移に関するコメント（授業改善との関係など）

当該科目は、社会調査についての基本的な事項の理解を目的としているために、多くの項目が講義される。このため、講義を欠席すると理解でない項目がでてくる可能性がある。３年間の受講者の学年割合の推移を見ると、出席率の高い１年生の受講者が増加し、出席率の低い 4 年次以降の受講者が減少している点もB－評価の割合増加に関係していると思われる。

また、当該授業は対面授業を原則としているが、コロナ蔓延のため、オンラインでの受講者も一定程度見られるため、講義項目の整理、削減も行った。その分、学生にとって知らなければならないことが少なくなったこともB－評価の増加につながった思う。

③その他（データを見て感じられる点、改善点など）　＊ご記入は自由です。

講義を長い期間担当していると、ついつい講義項目が増加していってしまう。コロナへの対応の中で講義項目の整理を行わざるを得なくなり、整理・削減したが、今後こうした内容の精選を恒常的に行っていく必要があろう。

⑤アセスメント項目(5)

＜文化の多様性を尊重しつつ、世界市民として、生命の尊厳と平和を志向する。＞

○アセスメント指標１：履修科目の成績と授業アンケートの「到達目標」の達成度

対応科目（パイロット）におけるB－評価以上の達成率は、おおむね８割を超えており、適切な教育と適正な評価がされていると考えられる。「倫理学概論Ⅰ」も履修者の増加もあいまって、5 割台（15 名中８名）と低かったときよりも、改善されたと言える。

科目名	年度	B－以上	履修者数	科目名	年度	B－以上	履修者数
比較文化Ⅰ	2019	85.9%	99	比較文化史概論	2019	79.5%	215
	2020	94.8%	153		2020	93.1%	261
	2021	92.2%	102		2021	90.0%	211
倫理学概論Ⅰ	2019	53.3%	15	東欧の歴史と文化	2018	85.0%	107
	2020	68.2%	44		2019	81.8%	121
	2021	66.0%	53		2020	79.0%	119
国際社会論	2019	86.4%	22				
	2020	82.9%	41				
	2021	85.7%	77				

（成績に関する教務部資料より作成）

《科目の自己点検評価の例》　（「担当科目自己点検のためのコメント」より）

「比較文化Ⅰ」

①B 評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等

定期試験、期末レポート、毎授業時の Discussion 報告書の提出などの要素で成績評価をしている。今年度の授業では、履修者 101 名の内、B－以上の成績を取った学生の人数は 90 名であり、文化を比較することの意義や重要性を多くの学生が理解したと思われる。

②授業の到達目標の達成度の推移に関するコメント（授業改善との関係など）

B の基準をどこにするかによって、B 評価は増減するが、Ｃ＋以下の人数が４名ほど（N評価は除く）であり、ほとんどの学生がこの授業内容を十分に理解したと判断できる。B の割合は昨年度とほとんど変わっておらず、ほとんどが B 評価になるという状況である。特に今後　改善する点は見当たらないが、あえて言えば、B 評価の基準をもう少し厳しくしてもよいのかもしれない。

「倫理学概論Ⅰ」

①B 評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等

3 年間の B 評価の増減 27%→38%→33%は、他の増減と比べると、D 評価 13%→14%→8%、C 評価 33%→14%→13%、A 評価 27%→27%→30%、S 評価 0%→0%→2%であるから、相対的に A が微増して、C と D が減少していることと比較すると、B は横ばいの傾向にあるといえる。授業改善の工夫としては、Pass の授業観察等による第三者の助言を取り入れつつ、ディスカッションで多様な意見を拾うことと、授業内容の理解とが両立するように心がけてきた。また、2020～21 年度はオンライン授業となり、予習動画を用いて、授業をディスカッション中心に運得するいわゆる反転授業を取り入れた。比較

的課題が多い授業であるが、履修者が少しずつ増えているので、受講者にはおおむね好意的に受け止められていると考えられる。
②授業の到達目標の達成度の推移に関するコメント（授業改善との関係など）
「あなたはシラバスに書いてある到達目標をどの程度達成できたといますか」の項目の数値（%）の推移としては、３「70～79%」を選択した割合が 33%→22%→29%、４「80～89%」を選択した割合が 47%→33%→29%、５「90%以上」を選択した割合が 13%→33%→35%であり、全体的に見ると、３は微減、４が減少、５が増加傾向にあるといえる。なお、授業改善の取組としては、Pass の授業観察等により第三者の助言を取り入れつつ、ディスカッションで多様な意見を拾うこと、授業内容の理解とが両立するように心がけてきた。また、2020～21 年度はオンライン授業となり、予習動画を用いて、授業をディスカッション中心に運得するいわゆる反転授業を取り入れた。予習動画は復習にも活用できることから、到達目標達成度５「90%以上」の増加につながったと考えられる。
③その他（データを見て感じられる点、改善点など）　＊ご記入は自由です。
今年度は予習動画を増やすなど工夫をしたが、今後とも教材の再検討を含め、教材の理解が履修者にまんべんなく行き渡る工夫を続けていきたい。

「国際社会論」
①B 評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等
　国際社会論講義における B 評価は概ね 50%を前後していると思われる。より B 評価の学生を増加させるために講義に可能な限り新しい話題や学会で紹介される事例研究や理論研究を取り込んで履修者の好奇心を刺激していたと思う。しかしこのようなど努力は同時にテキストなしに講義を進める結果となり、講義内容によっては難解な授業になってしまうことも避けられれない。残念ながら本年もコロナ禍によって対面講義が出来なかった。履修者の学習意欲を維持するために、バングラディシュでの調査や、ゼミでの研修の様子などを講義中に消化したりした。　これが学習意欲また成績の向上に結びつくと信じている。
③その他（データを見て感じられる点、改善点など）　＊ご記入は自由です。
講義の目標として協調や多様性をあげてきたが、昨今の国際情勢は次第に緊張を高めている。このような時だからこそ現実を直視し、それでも世界と協調しつつ経済を運営していかなければならないことさらに強く講義で伝えて行きたいと考える。

○アセスメント指標２　：　海外研修参加者・留学学生へのアンケート（研修終了後、留学からの復学時）　今回はアセスメントを行わなかった。

⑥アセスメント項目(6)
＜学ぶことの意味を理解し、自律的学修者として、目標をもって自己の成長を図る。＞
　アセメント実施項目に入れていない。今後はこの実施も行う必要がある。
⑦アセスメント項目(7)
＜人間主義の社会に向かって、他者と協力する姿勢やリーダーシップを発揮する。＞

○アセスメント指標１：履修科目の成績と授業アンケートの「到達目標」の達成度

対応科目（パイロット）におけるB－評価以上の達成率は6割を超え、おおむね適切な教育と適正な評価が行なわれているといえる。

科目名	年度	B-以上	履修者数	科目名	年度	B-以上	履修者数
児童福祉論Ⅰ	2019	41.00%	117	平和学	2018	56.0%	25
	2020	65.20%	46		2019	78.3%	23
	2021	60.00%	45		2020	87.7%	65
人間の安全保障	2019	87.50%	16	ジェンダーの社会学	2018	81.0%	248
	2020	89.70%	29		2019	79.6%	270
	2021	84.20%	76		2020	87.0%	378

（成績に関する教務部資料より作成）

《科目の自己点検評価の例》　（資料：「担当科目自己点検のためのコメント」より）

「児童福祉論Ⅰ」

①B評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等

全体の人数に占めるB評価（B＋～B-）の割合は、ほぼ変わりなく推移しているが、やや成績が下がっている傾向にある。受講する学生が理解しやすいように、視聴覚教材を使用したり、話し合う機会を設けたりしながら、学生が興味・関心をもち、飽きずに最後まで授業に取り組めるように工夫をしている。予習・復習課題を課すことで、自分で考える時間を設け、授業中に解説をすることで理解度をあげるようにしている。

②授業の到達目標の達成度の推移に関するコメント（授業改善との関係など）

2021 年度は、他の年度に比べると、目標を達成できた学生がやや減少したようである。受講者は 2 年生が中心となっており、学期の途中で対面からオンラインに授業形態が変更となり、集中して授業に取り組むことが難しかったことが影響していると考えられる。社会状況によって、授業形態が変化することがあるため、どのような授業形態になっても学生が目標を達成できるように工夫していきたい。

「人間の安全保障」

①B評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等

B 評価を得る履修者は 8 割を超える状態が続いており、到達目標にいたる授業課題がある程度適正なものであると判断している。授業ごとに 200-300 字程度の比較的短い課題レポートを課し、授業内ではこの課題をめぐる討論を中心としたグループワークを行った。ただ、学習をより発展させて実際の政策や活動に関する知見を広げて、その効果を測定できるようなレベル（A+）にまで到達させるような学修方法を開発する余地があると考えている。

②授業の到達目標の達成度の推移に関するコメント（授業改善との関係など）

2020 年度、2021 年度とオンライン授業となったため、履修者には従前よりも個人学習に取り組む主体性が求められたと思う。課題の提出状況、及びその記述内容には相応の自習の成果が見て取れ、主体的に取り組めていたものと思われる。その結果として大体の履修者が目標到達を可能にしたものと考える。

「平和学」
①B 評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等
B 評価を得る履修者は増加してきており、2020 年度は 8 割を超える結果となった。2020 年度はオンライン授業として実施したが、それまでの履修者数から急激に増加したこともあって、授業運営の在り方に工夫が必要であった。テキスト内容は専門的でやや難解であったが、短く分担してテキスト読解を授業中に報告する課題を課したことで、履修者の理解を進めるのに有効であった。また、授業ごとに 300 字程度の比較的短い課題レポートの設問も回答しやすいものになるように工夫した。ただ、履修者数が多く、グループワークのモニターが困難であり、グループによっては討論が停滞するような事態がしばしばおこった。課題レポートなど個人学習のみに注力することがないようにするための工夫が必要と考えている。
②授業の到達目標の達成度の推移に関するコメント（授業改善との関係など）
2020 年度は履修者増大のため、課題レポートなど個人学習の成果を主たる成績評価の対象とすることになった。その結果として B 評価を得る履修者が増大したのではないかと思われる。これは履修者が自律的に学修できたという側面もあるが、実際の授業ではそうした個人学習の成果を共有するというワークが必ずしもうまく機能していなかったことをみると、グループワークへの貢献を成績評価の対象にすることも検討する必要があるように考えている。

基準５　学生の受け入れ

① 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。
② 学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や運営体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。
③ 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。
④ 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

【１】2020 年度の自己点検・評価および外部評価で課題となった事項
④指定校推薦学生（全科目の評定平均値４以上が推薦の条件であり優秀学生が集まっている）の入学時のプレイスメントテストのスコアが低いので、合格決定から入学までの入学前教育の充実が望まれる。PASCAL 入試学生を授業のアクティブ・ラーニングの活性化に参画させる方策を考える。

【２】2021 年度の方針・改善計画（および中期的な改善計画）
④入学前教育は大学として取り組んでいる（文学部については理数的能力の開発など）が、学部あるいはメジャーとして学生の理想像を考え、啓蒙に取り組みたい。昨年より文学部生に在学中に読んでもらいたい書籍や親しんでもらいたい映画や音楽のタイトルを推薦者のコメントとともに学部 HP に載せており、受験生や合格生もその対象に含んでいるが、今後は受験生や合格生に特化した推薦図書等のコーナーを作りたい。PASCAL 入試学生は EL（オープンキャンパスや履修説明会で受験生や 1 年生の相談に応じる学生グループ）や自治会活動に自発的に参加してくれているが、各種授業の SA として優先的に採用したい。

【３】2021 年度の取組みの点検・評価と 2022 年度以降の方針
入学前教育に関連して、指定校推薦入試およびパスカル入試合格者等については、他の学生を牽引する役割を果たせるような方策が必要である。アクティヴ・ラーニングを取り入れているゼミでは、パスカル入試の合格者が積極的なディスカッションを先導した例が見受けられた。（現在でも一般入試合格者よりも推薦入試の合格者の方がＳ Ａとして活躍している状況が認められるが）今後、初年次セミナーや 2 年次の選択必修科目である「文学の学びとライフデザイン」などにＳ Ａとして積極的に採用し、アクティヴ・ラーニングにおける先導的役割をさらに担ってもらえるよう対策を練る必要があると考えられる。 具体的な事態の改善策としては、入学前教育によってフォローアップを図ることが考えられる。入学前教育については、全学統一による業者委託で行っているものが既にある。それに加えて文学部独自の入学前学習の課題についても検討・協議を試みた。具体的には、高校時点での学習のフォローだけでなく、入学後の各メジャーの学修を先取りした指定図書の選定を行った。その上で、文学部のHP、あるいはSNSを利用して、各教員にリストアップしてもらった文学作品や触れてもらいたい芸術作品などを発信した。入学前の読書経験が入学後の学修に効果的に連動する仕組みが作られるよう、具体的な方策を練る必要がある。また、日本語による表現力、英語で書かれた文章の理解力を高める等の方策についてはより具体的に対策を練っていく必要がある。 また、日本語理解能力の差を埋めるために、解決策として2023年度から Placement Test の結果に応じて初年次セミナーのクラス編成を行う。その上で、日本語読解能力の低いクラスに対しては、文章における主述関係の把握、係り受けの構造の認識などを意識したリーディングとライティングの訓練を行うことも有効と考えている。 なお、通信教育部での学生受け入れでは、入試などで選抜するということを行っていない。そのために、日本語教師養成課程には 860 名もの学生を抱えている。日本語メジャーの教員は現在４名であり、スクーリングやレポート添削などで多大な負担となっており、今後、とくにこの課程については入学者の選抜などの検討が必要になると思われる。

基準６　教員・教員組織

① 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部･研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。

② 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。

③ 教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。

④ ファカルティ・ディベロップメント（ＦＤ）活動を組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上及び教員組織の改善・向上につなげているか。

⑤ 教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

【１】2020 年度の自己点検・評価および外部評価で課題となった事項
④ コロナ禍でオンライン授業の工夫が要求された。今後もオンライン授業だけでなく、ポートフォリオの活用などさまざまな教授法の改善が必要と思われるので、FD 活動を活発に進めたい。 ⑤ 教員の年齢構成に偏りが見られ、今後 30 代を中心とした教員の採用が必要である。能力が変わらない場合は女性を優先採用したい。教員間における担当科目数の偏りについても改善が望まれる。メジャーの増減や統廃合や科目の増減についても検討が必要である（担当科目数が多い分、教員が学生と向き合える時間が少なくなる）。検討のための資料としてカリキュラム満足度調査結果に加えて、各科目の受講者数の経年推移も考慮すべきである。

【２】2021 年度の方針・改善計画（および中期的な改善計画）
⑤ FD 委員会で検討し、学部の FD 活動を活発化したい。本年度は基準４④でも述べたように、ティーチング・ポートフォリオの作成にも注力することとした。 ⑥ 教員の採用については 30 代を中心としたいが、公募の場合、年齢基準は記すことができない。現状は、(1)科研費採択または権威ある学術誌に論文が掲載または SCOPUS に紹介された者、(2)30 代など若手研究者優先、(3)以上の点が変わらない場合、女性優先―としているが、昨年この条件で「イギリス文学」採用応募者が 1 名しかなかったため、条件をよく検討したい。なお、学部での教員採用は大学院人事とも連動しており、講師または准教授として採用された若手教員が、能力が高ければ、早く大学院担当になれるような受入体制が必要である。これについては、本年春学期に大学院運営委員会で改善策が検討され、実施に移された。メジャーの増減、統廃合、科目の増減についてはカリキュラム検討委員会で検討する。9 月下旬までにカリキュラム満足度調査を行い、その資料等を参考に検討委員会で検討する。

【３】2021 年度の取組みの点検・評価と 2022 年度以降の方針
ポートフォリオの活用については、全学の FD・SD 委員会で、各学部主催で FD 活動を行う方向が

打ち出された。10 月にティーチング・ポートフォリオ（＝TP）作成について、2021 年度文学部 FD フォーラムを開催して、3 例の実践報告（オンライン授業の活用法も含まれていた）を行い、学習支援センター長にコメントを依頼した。これを機に、本年度は学部で 5 名の教員が TP 作成に取り組むこととなった。大学としては今後 3 年間で全教員が TP を作成することになっている。文学部の TP 作成状況については基準 4 ④を参照。また、学部 FD 委員より提案があり、2 月にカリキュラム改定に関する 2021 年度文学部 FD ワークショップを開催した。カリキュラム改定において、踏まえるべき点（カリキュラムポリシーに、より合致したカリキュラムの構築と最新の学生の関心）を皆で確認し合った。カリキュラム改定の状況は基準 4 ③を参照。以上、本年度は学部で 2 度、独自の FD セミナー（文学部 FD フォーラムと文学部 FD ワークショップ）を開催したが、これは学部の教員達が能動的に計画し参加することになるのでよい傾向である。出席はどちらも 30 名ほどであり、49 名中 62%にあたる。学部としては、全学レベルのどの FD セミナーへの出席率よりもよい出席率となった。しかし、他学部の教員の客観的な意見は有難いので、開催については全学にアナウンスし参加を募る方がよいと考える（文学部 FD フォーラムでは教育学部から数名参加してくれた）。

ある教員は演習Ⅳを使って昨年度同様、「学びの集大成」の作成に取り組み、学生からは（1～2 年次）「色んな授業をとっていってやりたいことが広がった」（3～4 年次）「ゼミで学んだことは、小説を文章通り読まないこと。言葉の裏を考えること。遠回しの表現の言いたいことの核心をつかむこと」「やることの優先順位がつけられるようになった。周りとの協調性。人に教えることの難しさ、楽しさ［を味わえるようになった］」（終わりに）「思い起こせば今の自分の基礎の部分は大学がほとんどだなと思った。今までと比べると、現実を見れるようになったなと思った。いい意味で変わったな」のような振り返りがあった。ユーモアもあり、文学部のメジャー制の成果が出ていると思われる。課題としては、作成した学生の母数が少なかったので、学部の教育効果を見るまでは行かなかった。オンライン参加者もおり、当日欠席の者もいたので、教室で過去のリフレクションシートその他の記述資料を確認しながら自分の 4 年間の成長の軌跡をたどる作業ができなかったとのことである。「学びの集大成」作成作業をオンラインで行う工夫が今後は必要となる。

次に専任教員の採用については、30 代を中心とした若手を採用したいが、公募の場合、年齢基準を記すことができない。現状は（1）学問的に高い業績を示す者（著書、論文等を点数化。権威ある学術誌に掲載または SCOPUS に紹介された論文は高い点数。科研費等の競争的資金採択も点数化）を優先、（2）できるだけ若手研究者を重視、（3）以上の点数が変わらない場合、女性優先―としている。この観点で、2021 年度は「英語教育」「イギリス文学」「ロシアの文学と社会」の分野の 3 件の公募を実施した。「英語教育」と「ロシアの文学と社会」はある程度応募があり、44 歳の女性教員と 48 歳の男性教員を採用した。「英語教育」では大学院担当の補充も考えなければならず、「大学院担当可」の条件をつけたため、また「ロシアの文学と社会」では文学と社会学の 2 分野の担当が可能な人材を求めたため、30 代では無理であった。しかし、「イギリス文学」は応募者が 1 名しかいなかった。原因としては、募集期間が実質 1 か月ほどで短かったこと、「適切な応募者がいた場合は、早期に募集を締め切ることがある」と記したこと（応募者が殺到しないように考えた措置）、「イギリス古典文学史」の年間シラバスの作成とこの科目の模擬授業のレジメ提出を要求したこと等―が考えられた。再募集となったが、対策として、募集期間を延ばし、「早期締め切り」条項、指定科目の年間シラバスと模擬授業のレ

ジメ提出を撤廃した。この分野も「大学院担当可」の条件をつけているが、これは必要な条件なので撤廃できない。現在も「イギリス文学」は募集中であるが、模擬授業やシラバス作成で「イギリス古典文学史」を指定しなかったのはよかったかもしれない。若手でこの分野を研究する者は少ないので、応募を敬遠する大きな要因になると考えられるからである。なお、学部での教員採用は大学院の採用人事とも連動しており、大学院の補充が必要な場合、学部で准教授として採用された若手教員が（優秀で業績があれば）その後3年間の教育研究状況を確認することなく大学院を担当できる体制が必要である。これについては本年度春学期に大学院運営委員会で検討され、規程の改定の後、早期に実施に移された。

また、文学部の女性教員の比率は2020年度は28.6%(49名中14名、助教を含む)であったが、今回の採用で30.6%(49名中15名、助教を含む）となり、大学が示した目標である20～30%は達成した。教員の年齢別構成は2020年度の20代0名、30代3名、40代6名、50代13名、60代27名から、2021年度は20代0名、30代3名、40代8名、50代13名、60代25名（2022年4月1日段階）となったが、若手は6.1%のままである。大学の目標は2025年で若手20%であり、文学部の教員定数を45名とすると9名が目標となる。2025年3月までに10人の教員の交代があり、現30代のうち2名が40代になるので、8名30代を採用する必要がある。

その他、メジャーの増減（統廃合)、科目の増減（統廃合）については、2019年度から3回実施されている文学部学生満足度アンケート調査の結果を参考に現在カリキュラム検討委員会で検討されている。各科目の履修者数の経年推移も考慮している。同検討委員会は昨年4月から本年2月までに全体会を8回実施し、途中必要に応じてメジャー毎の分科会を実施した（検討状況は基準4③参照)。カリキュラム検討（2023年度施行）は続行中であり、履修者数の経年推移も考慮しているが、この数値は額面通りには受け取れないと考えている。他の人気科目や必修科目（共通科目を含む。週2回開講の科目もある）と「バッティング」する場合があるからである。とくに文学部は約350の科目があるので、半期で170ほどの科目が時間割にひしめいている。バッティングを避けるには、科目数自体を統廃合で減らす必要がある。

なお、通信教育部の日本語養成課程では、今後、日本語教育関係の教員を増やす必要がある。文化庁は公認日本語教師の国家資格化を打ち出し、2024年度からの施行を目指している。日本語教師養成機関が認可制になり、所属担当教員についても審査が行われる。その養成機関では「日本語教師養成における教育内容」として提示された日本語学領域、日本語教育領域、社会文化地域領域の３領域（50項目の教育内容）をカバーしなければならない。本学文学部の日本語メジャー専任教員4名は全員が日本語学領域であり、日本語教育領域の専任教員が必要となる。特に日本語教育領域では「日本語教育実習」担当教員が必要とされ、日本語教授歴と日本語教育専門業績が審査されるため、「指定日本語教師養成機関」審査で認可される体制を整える必要がある。

通信教育部日本語メジャーでは850名の学生が在籍して、日本語教師を目指している学生も少なくない。しかし、教育に携わる日本語メジャーの教員は４名であり、通学部の授業の他に、通信教育部でのスクーリングやレポート添削などで負担が多くなって研究や学生指導に支障をきたしており、教員の増員が望まれる。

基準７　学生支援

① 学生支援に関する大学としての方針に基づき、学生支援の体制は整備されているか。また、学生支援は適切に行われているか。

② 学生支援の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

【１】2020 年度の自己点検・評価および外部評価で課題となった事項
① メンタル的にアクティブ・ラーニングに参加できない学生への配慮が必要である。 ② オンライン授業に関連する学生支援が必要である。

【２】2021 年度の方針・改善計画（および中期的な改善計画）
① アクティブ・ラーニングに参加できない学生については、大学として配慮している。しかし、教員は日常的に接触することになるので、適切な対応ができるように、セミナー等で事前に学ぶ必要があることから、学内外で開かれるメンタルヘルスセミナーに教員達が積極的に参加するよう促した。 ② オンライン授業については、WIFI 環境等、学生によって状況が異なるので、丁寧に対応するよう、教員に確認する。またこれに関連する大学の FD ｾﾐﾅｰ等に積極的に参加するよう教員に呼びかけた。

【３】2021 年度の取組みの点検・評価と 2022 年度以降の方針
① コロナ禍の影響が顕著に表れている例が、合理的配慮の申請数において見受けられる。文学部は８学部の中で合理的配慮の申請数が最も多かった。学生数が多いので絶対数が多いのは当然かもしれないが、2020年度春は15名、2021年度春は新規19名と毎年他学部の3～4倍の数に相当する（2020年度春15名のうち、継続で申請している者が13名）。 合理的配慮については次のような要望があった。 ・メンタルな病気のため、課題や期末レポートの提出期限を延ばしてほしい（５件）。これについては1週間程度延長を認めた。 ・下肢がよくないので教室の移動に時間がかかる。授業が連続した場合、30分の遅刻を出席にしてもらいたい。これについても認めた。 ・筋肉の病気で、寒さやストレスで身体の痛みが激しいので、取消期間を過ぎているが履修取り消しを認めてほしい。診断書付きでそれを認めた。 ・メンタルな病気のため、申請期限を過ぎているが、休学したい。診断書をもとに認めた。 ・神経症と抑うつ症のため、Zoom 授業のビデオをoff にして参加したい。これについても認めた。 ② コロナ禍でオンライン授業、あるいは、オンラインと対面のハイブリッドという形式で文学部の授業の多くがなされた。コロナ禍という特殊な環境の中での、学習環境の影響を一番大きく受けているのは1年次において対面授業を受ける機会がほとんどなかった2020年度入学生であった。1年次の時点でほとんど大学に来ることを許されなかった学生の中には、友人を作ることもままならず、2年次になっても大学内の居場所を見出せずにいた状況が見受けられた。また、2年次後半ではゼミ選択を余儀なくされるが、対面で受けた経験が少ない状態で、演習の選択にとまどう学生が多く出ると予想された。メジャーとゼミ選択で路頭に迷う学生を少なくするために、それまでゼミ個別で行っていたガイダン

スをメジャー単位で行い、その上で個別ガイダンスを実施した。また、教員によっては、2年次で授業等では接点の少ない学生をオフィスアワーに招き、学生同士を交流させる試みも行った。また「文学部の学びとライフデザイン」では、SAが授業を企画・設計する試みをおこなった。「コロナ禍とどう向き合うのか」という内容で、SAみずからの経験を語る中で、答えのない問題にどのように向き合うのかを考える機会を受講者に与え、好評であった。

また、オンライン授業に対する学部生の評価を知るために、2021年8月から2021年9月にかけて「2021年度文学部生カリキュラム満足度アンケート」を実施し、396名から回答を得た。内訳は、2017年度以前14（3.5%）、2018年度34（8.6%）、2019年度88（22.2%）、2020年度111（28.0%）、2021年度149（37.6%）であった。

コロナ禍におけるオンライン授業評価をみるまえに、学生をめぐる状況―メンタルヘルスと実家の経済状況の変化―について確認してみた。まず、コロナ禍における学生のメンタル状況の変化について尋ねてみると、「頻繁に落ち込むことがある」が21.2%、「たまに落ち込むことがある」が46.7%となっている。両者を合わせると、67/9%の学生にコロナ禍でメンタルの減退がみられたことがわかる。このような厳しいメンタル面での状況下で、大学の授業に臨んでいたことが判明した。

また、コロナ禍において家庭の経済状況が変化した事実も見受けられた。答えを見ると、「たいへん苦しくなった」が4.3%、「苦しくなった」が27.0%となっている。この結果は、新型コロナウィルス感染症の蔓延によって、3割を超える学生の実家の家計が悪化したことを示している。

その上で、コロナ禍における対面授業に対する学生の評価を調査の上分析した。これをみると「高く評価する」が7.8%、「評価する」33.8%となっており、肯定的に評価すると回答した学生は41.6%と半数以下になった。これに対して「評価しない」は11.1%、「まったく評価しない」は3.0%であり、否定的な評価は14.1%であった。目立つのは、「どちらともいえない」と回答する学生が44.2%と半数近くに及んだことである。この結果が、コロナ禍によるものなのか、対面授業を実施した科目によるものなのか、さらなる分析が求められる。

コロナ禍におけるオンライン授業に対する学生の評価を調査した結果、「高く評価する」が14.6%、「評価する」43.4%となっており、肯定的に評価すると回答した学生は58.0%と6割近くになった。これに対して「評価しない」は6.1%、「まったく評価しない」は2.3%であり、否定的な評価はわずか8.4%と1割に満たなかった。

結果として、コロナ禍における文学部の授業では、対面授業よりもオンライン授業の方が、相対的に評価が高くなった。コロナ禍における授業はオンライン授業が多く、対面授業が少数だったことを勘案する必要がある。

しかし、先述したコロナ禍における学生のメンタルヘルスの深刻な状況、実家の経済状況の悪化という、学生をめぐる困難な状況・背景からみれば、文学部のオンライン授業は、学生から一定程度の評価を得ていると考えられる。ただし、「どちらともいえない」と回答する学生は、対面授業と比較すると10%ほど低いものの、33.6%と3割を超えている。来年度以降、オンライン授業を実施する場合は、さらなる授業の改善が必要だと思われる。（別紙資料参考）

通信教育部では、2021 年 10～12 月の秋期スクーリングにおける各科目のスクーリング試験終了後に授業アンケートを行った。専任・非常勤の全教員の授業で受講者が 10 名以上の授業でオンライン（選択式・自由記述式）で行った。対象学生は 5810 名で、アンケート回収数は 2864 名、回収率は 49.3%であった。学部別の数値は出ていないが、文学部の在籍数が全体の 1/4 なので、回答者の 1/4 は文学部と考えてよいと思われる。

オンライン授業に満足しているかという問いに、講義科目で　51.74%が「かなり満足」と答え、40.78%が「満足」と答えている。92%以上の学生が満足していることがわかる。また、実技や演習科目でも「かなり満足」が 54.81%、「満足」が 37.04%で、やはり　満足した学生が 92%近くにのぼる。コロナ禍で、オンライン授業を余儀なくされた昨年度と比べると、満足度は講義科目で７％も上昇している。実技・演習科目では約９％の高い伸びとなっている。オンライン授業が２年目となり、学生がパソコンの操作や Zoom アプリの使用に慣れてきて満足度があがったとみられる。通信教育部の学生にとっては、オ

ンライン授業は好評である。通教生は全国に散らばっており、教室までの移動する時間が必要ないことや交通費の負担もないこと、さらに日常生活の中で学べることが好評である理由と思われる。オンラインスクーリングの受講者も増えている。コロナ禍以前の 2019 年秋期のスクーリング受講者は 4366 名であったが、オンラインで行った 2021 年の秋期スクーリングの受講者は 5902 名で、1536 名増えている。手軽に授業が受けることができると同時に、学習内容も対面授業と同じ程度に学べるということであろう。このような理由から、2022 年度は、春と秋のスクーリングは全面的にオンラインの授業で実施することになった。しかし、夏スクーリングは対面で行い、学生たちにキャンパスで学ぶ機会を持つように配慮している。対面によって、直接、学生同士が交流して学び合う機会が必要である。

基準９　社会連携・社会貢献

③ 社会連携･社会貢献に関する方針に基づき､社会連携･社会貢献に関する取り組みを実施しているか。また、教育研究成果を適切に社会に還元しているか。

【１】2020 年度の自己点検・評価および外部評価で課題となった事項
①　学部として、学生・教職員の社会連携・社会貢献の状況を組織的に把握し、地域社会のニーズに合わせてさらなる活動を推進することが望まれる。学生による積極的な活動の推進も望まれる。DP や AP と関連し、学生による上記の活動を推進する旨の記述があることが望ましい。

【２】2021 年度の方針・改善計画（および中期的な改善計画）
①　学生の里山保全活動・農業体験等のボランティア活動を科目（学部インターンシップ）として単位を認めている。昨年から履修が始まったばかりであり、参加数がまだ少ないため、積極的に推進する方策を検討する。また、地元八王子市や商工会議所、商店会等が行っている活動に学生が参加し、あるいはそれらとのコラボの活動を推進する「桑都プロジェクト（メジャー横断型で教員と学生が参加)」を複数のゼミが参加する形で立ち上げている。

【３】2021 年度の取組みの点検・評価と 2022 年度以降の方針
①　社会連携・社会貢献については、2021 年度は「文学部桑都プロジェクト」として本格的に取り組み、大きな成果を上げた。本年度は江戸時代末期に八王子を訪れたシュリーマン（その後トロイ遺跡を発掘）の生誕 200 周年であり、八王子が世界史に果たした貢献の一端を明らかにするイベント「桑都プロジェクト～シュリーマン生誕 200 周年を記念した八王子まちおこし～」を行った。教員と学生の計 47 名が参画し、コンソーシアム八王子に助成申請するグループ、SNS 発信グループ、シュリーマン饅頭企画グループ、書店企画グループ、展示企画グループ、イラストとチラシを作成するデザイン・グループ等を手分けして担当。コロナ禍のため、主にオンラインで打ち合わせ、10 月から 2022 年 2 月まで（当初 2 週間の予定が好評につき大幅に延長）実施された。（別紙資料参考）生菓子店でシュリー饅を販売、大型書店とコラボして店頭にシュリーマンおよびそれと関連する学生選書コーナーを設置、市の商工会議所と連携して、管轄のギャラリーを使わせてもらってシュリーマンと八王子出身の医師肥沼信次の共同展示を実施（これは 2 週間）、ギャラリーには市長や大学関係者、一

般市民ら約 360 名が来場した。饅頭の売り上げや関係書籍の販売（多い日は 1 日 50 冊）とともに、八王子の新たな側面を紹介し今後の観光資源のひとつとなることで八王子の町おこしに貢献したといえる。大手メディアやタウン誌にも多く紹介された。（別紙資料参考）さらに東京富士美術館「古代エジプト展」の広報サポーターとして、同展の出品元であるドイツ国立ベルリン博物館群が、シュリーマン・コレクションを有していることあら、同展の SNS 等での広報サポートを学生が展開した。これらのプロジェクトは大学コンソーシアム八王子」2021 年度助成事業に採択されている。

また、尾崎ゼミでは「グローカル×SDGs = Boost Up 八王子」の事業名で、市内の外国人と飲食店を繋ぐ SDGs プロジェクトに取り組み、 地球規模で考え、地域で行動するという企画が、これも大学コンソーシアム八王子の学生事業補助金に採択された。さらに、西川ゼミでは、諏訪地域の特産品を長野県シニア大生と共同開発し、その地域貢献の活動が、地元紙など複数のメディアで紹介された。

「2021 年度文学部生カリキュラム満足度アンケート」からみる
カリキュラムポリシーの自己点検

2021 年 8 月から 2021 年 9 月にかけて「2021 年度文学部生カリキュラム満足度アンケート」を実施し、396 名から回答を得た。内訳は、2017 年度以前 14(3.5%)、2018 年度 34(8.6%)、2019 年度 88（22.2%)、2020 年度 111（28.0%)、2021 年度 149（37.6%）であった。

以下、アンケートの結果から、カリキュラムポリシーの自己点検を行いたい。なお、各項目で示すグラフは棒グラフによる 5 点法で満足度・理解度・接合度の結果を示している。評価は 1 に近いほど低く、5 に近いほど高い。（ただし、「文学部の学びとライフデザイン」と「演習（ゼミ)」はのぞく）

（1）「初年次セミナー」と「人間学」

「初年次セミナー」については、2018-2019 年度入学者、2020 年度入学者、2021 年度入学者に分けてみていく。

「初年次セミナー」(2018-2019 年度入学者)

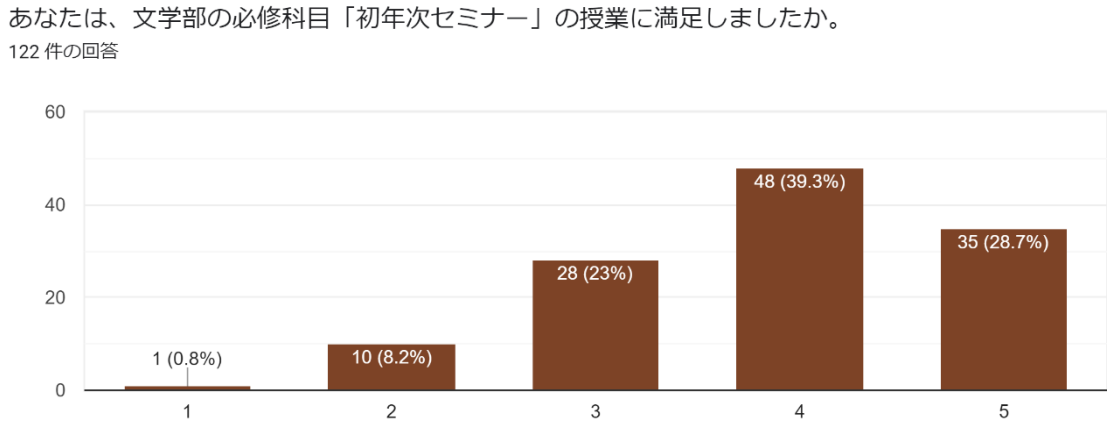


図 1-1 「初年次セミナー」満足度（2018-2019 年度入学者）

図 1-1 は 「初年次セミナー」(2018-2019 年度入学者）の満足度である。「初年次セミナー」の満足度は 4 と 5 を合わせると、68.0%の学生が満足していると回答している。満足していない 1 と 2 の回答者が 9.0%であることからみても、総じて満足度は高いといえる。

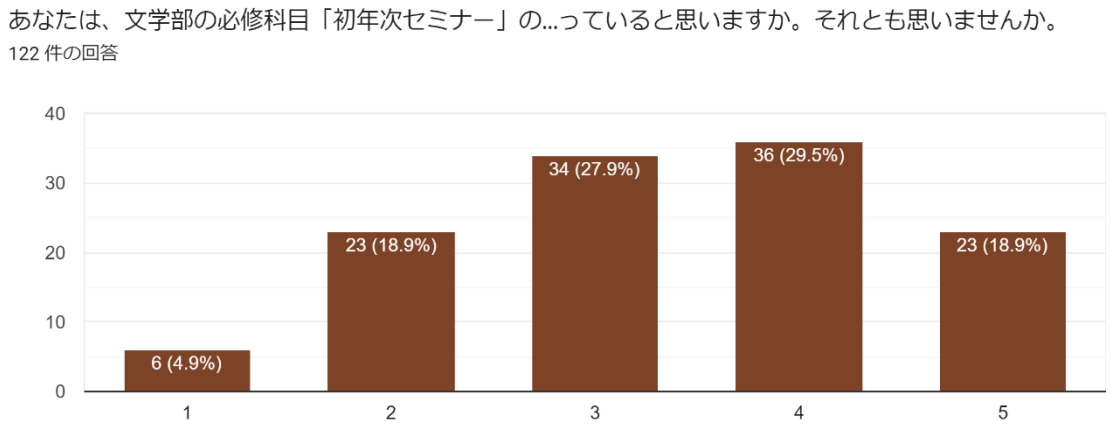


図 1-2 「初年次セミナー」と現在の勉学への接合（2018-2019 年度入学者）

また、「初年次セミナー」（2018-2019 年度入学者）が現在の勉学に接合していると考えている学生は、4 と 5 の回答者が 48.4%と 5 割近くになっている（図 1-2）。本科目は、その後の勉学への接合に一定の成果を果たしているといえる。しかし、その一方で、23.8%の学生がそう思わないと回答している。今後、文学部全体、各メジャーの学びを点検し、必要な措置を講じるべきであろう。

「初年次セミナー」（2020 年度入学者）

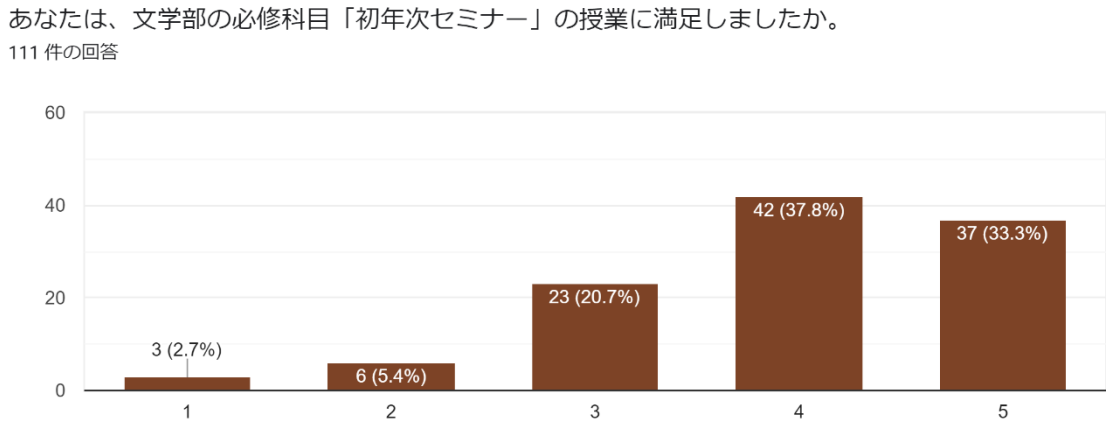


図 1-3 「初年次セミナー」満足度（2020 年度入学者）

図 1-3 は 「初年次セミナー」（2020 年度入学者）の満足度である。「初年次セミナー」の満足度は 4 と 5 を合わせると、71.1%の学生が満足していると回答している。満足していない 1 と 2 の回答者が 8.1%であることからみても、総じて満足度は高いといえる。

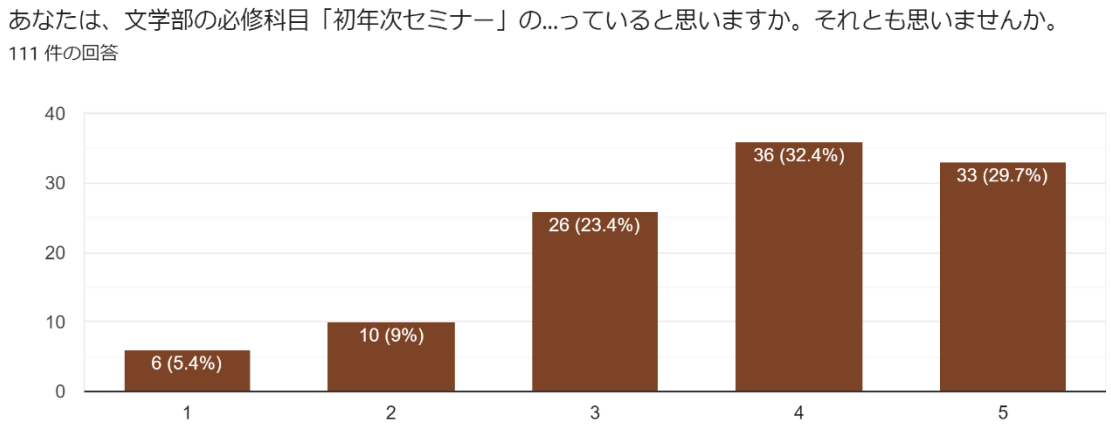


図 1-4 「初年次セミナー」と現在の勉学への接合（2020 年度入学者）

また、「初年次セミナー」（2020 年度入学者）が現在の勉学に接合していると考えている学生は、4 と 5 の回答者が 62.1%と半数を超えている（図 1-4）。本科目は、その後の勉学への接合に一定以上の成果を果たしているといえる。しかし、14.4%の学生がそう思わないと回答している。2018-2019 年度入学者と同様に、今後、文学部全体、各メジャーの学びを点検し、必要な措置を講じるべきであろう。

「初年次セミナー」（2021 年度入学者）

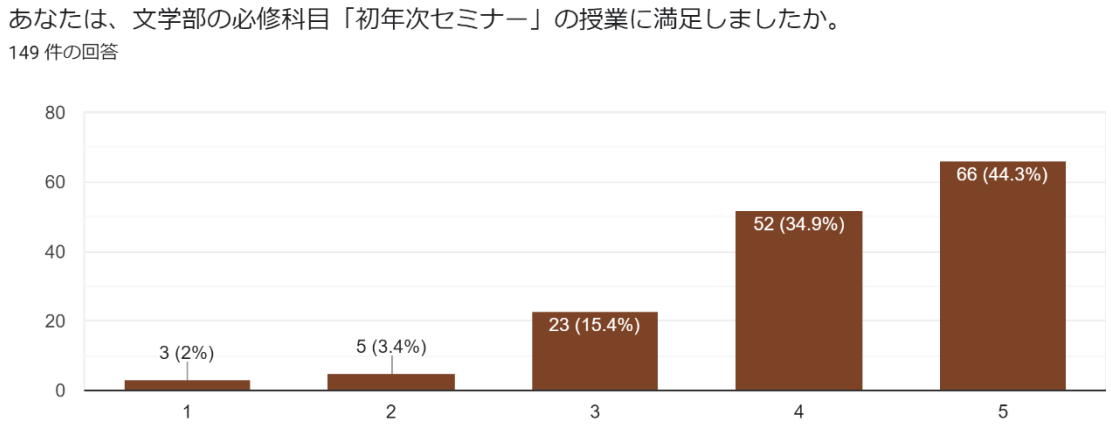


図 1-5 「初年次セミナー」満足度（2021 年度入学者）

図 1-5 は 「初年次セミナー」（2021 年度入学者）の満足度である。「初年次セミナー」の満足度は 4 と 5 を合わせると、79.2%と 8 割近い学生が満足していると回答している。満足していない 1 と 2 の回答者がわずか 5.4%であることからみても、全体的にみて満足度は高いといえる。

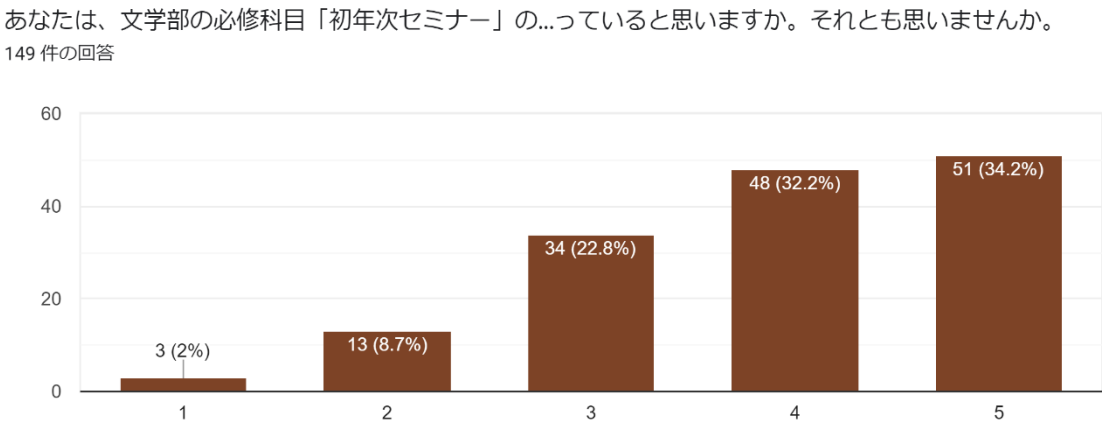


図 1-6 「初年次セミナー」と現在の勉学への接合（2021 年度入学者）

また、「初年次セミナー」（2021 年度入学者）が現在の勉学に接合していると考えている学生は、4 と 5 の回答者が 66.4%と 3 分の 2 を超えている（図 1-6）。本科目は、その後の勉学への接合に一定以上の成果を果たしているといえる。しかし、10.7%の学生がそう思わないと回答している。2018-2019 年度入学者、2020 年度入学者と同様に、今後、文学部全体、各メジャーの学びを点検し、さらに学生の勉学に接合できる科目のあり方を検討したい。

「人間学」（全回答者）

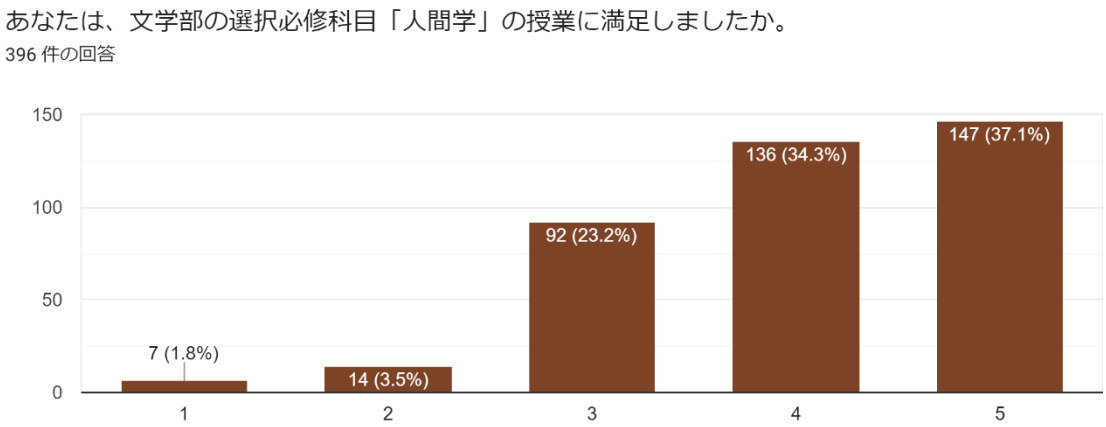


図 1-7 「人間学」満足度

図 1-7 は「人間学」の満足度である。「人間学」の満足度は 4 と 5 を合わせると、71.4%と 7 割を超える学生が満足していると回答している。満足していない 1 と 2 の回答者が 5.3%であることからみても、総じて満足度は高いといえる。ただし、「どちらともいえない」に該当する 3 の回答者が 23.2%いることは反省すべき点であろう。この学生層にどのように訴求するかについて、さらに点検する必要がある。

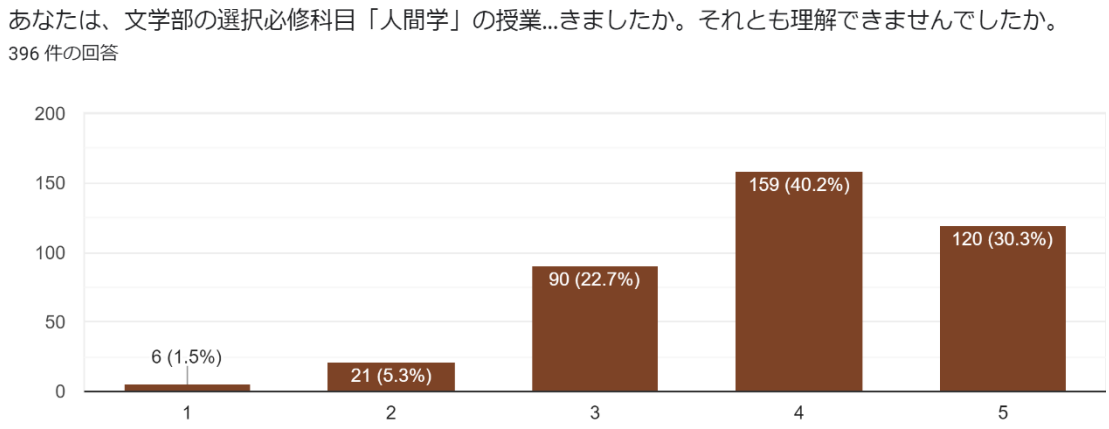


図 1-8「人間学」理解度

図 1-8 は「人間学」の理解度である。「人間学」の理解度は 4 と 5 を合わせると、70.5%の学生が理解できた回答している。理解できていない 1 と 2 の回答者が 6.4%であることからみても、総じて学生の理解度はきわめて高いといえる。今後は、「どちらともいえない」に該当する 3 の回答者が 22.7%の学生をふくめて、いかに理解度を高めていくのかについて本授業の内容を点検する必要がある。

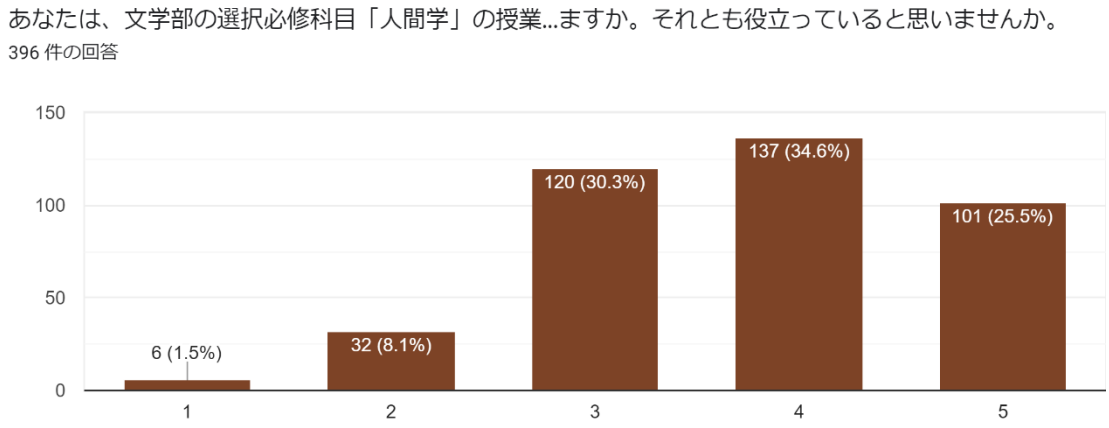


図 1-9「人間学」と現在の勉学への接合

図 1-9 は「人間学」とその他の勉学との接合度である。「人間学」の他の勉学への接合度は「役にたっている」に該当する 4 と 5 を合わせると、60.1%となる。この数値は、前年度調査の 51.4%から 10%近い上昇である。本科目が文学部の必修科目であることを鑑みると、この良化した結果を分析し、さらに学生の勉学に接合できる科目のあり方を検討したい。一方が「どちらともいえない」は 30.3%であった。しかし「役に立っていない」は 1 と 2 を合わせると 9.6%で前年の 21.1%から大きく改善したことが確認できる。今後は、満足度をさらに上昇させるとともに、「どちらともいえない」と回答した 30.3%の学生が他科目との連動性やシームレス化の方法・内容を考える必要がある。

（２）「文学部の学びとライフデザイン」

「文学部の学びとライフデザイン」については、2018-2019 年度入学者、2020 年度入学者に分けてみていく。

（2018-2019 年度入学者）

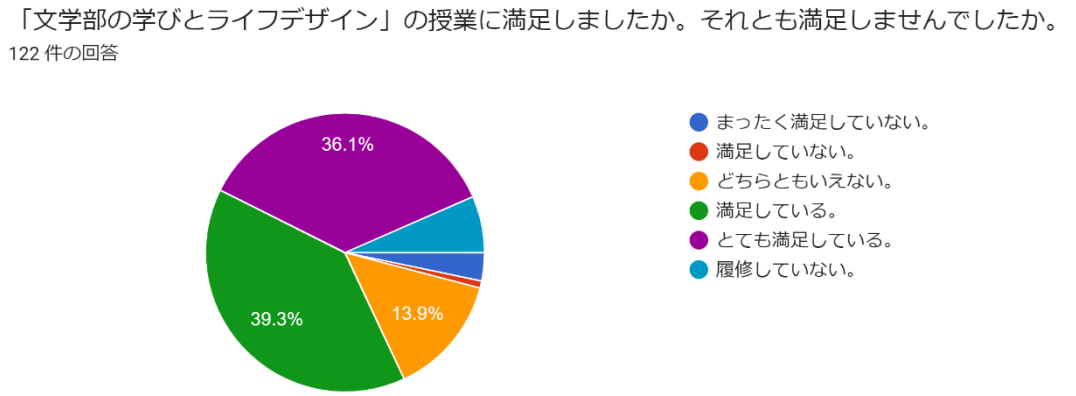


図 2-1 「文学部の学びとライフデザイン」（2018-2019 年度入学者）満足度

図 2-1 は 「文学部の学びとライフデザイン」（2018-2019 年度入学者）の満足度である。同科目は 2018 年度新カリキュラムで「アカデミックスキル応用」を改編して新しく設置された。そのため、他の項目より満足度を詳細に質問した。

同科目の満足度をみると、「とても満足」が 36.1%、「満足」が 39.3%で両者を合わせると 75.4%と 8 割近い数値となった。また、「どちらともいえない」が 13.9%、「満足していない」が 0.8%、「まったく満足していない」が 3.3%となった。

これらの結果から、試行錯誤が多かった初年度と次年度としては学生の満足度を高めることができたといえるが、「満足していない」と、「まったく満足していない」学生が合わせて 4.1%にとどまったことは評価したい。

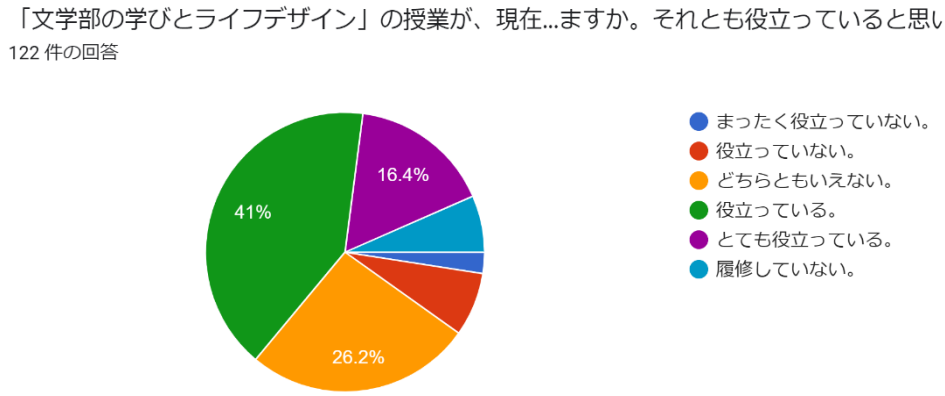


図 2-2 「文学部の学びとライフデザイン」と現在のほかの勉学への接合
（2018-2019 年度入学者）

図 2-2 は 「文学部の学びとライフデザイン」（2018-2019 年度入学者）の他の勉学への接合度度である。これをみると、同科目の他の勉学への接合度は「役にたっている」に該当する 4 と 5 を合わせると、57.4%となる。その一方で、「どちらともいえない」が 26.2%、「役に立っていない」が 7.4%、「まったく役に立っていない」が 2.5%でであった。本科目は、文学部のキャリア科目という位置づけで開講されているため、他科目との接合は必ずしも容易ではないが、来年度から少しでも他科目との接合度を高めることができるような工夫が必要である。

2020 年度入学者

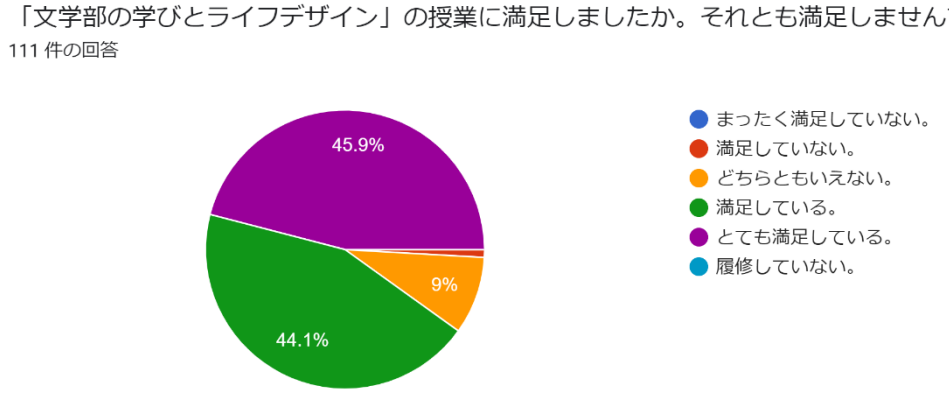


図 2-3 「文学部の学びとライフデザイン」満足度（2020 年度入学者）

図 2-3 は 「文学部の学びとライフデザイン」（2020 年度入学者）の満足度である。同科目の満足度をみると、「とても満足」が 36.1%、「満足」が 39.3%で両者を合わせると 90.0%と高い数値となった。また、「どちらともいえない」は 9.0%、「満足していない」は 1.0%に

とどまっており。学生の満足度がきわめて高いことが確認できた。

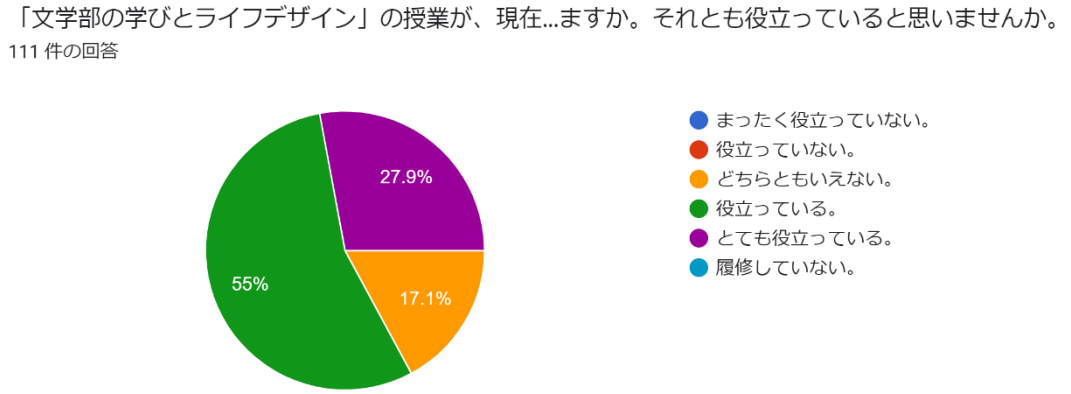


図 2-4 「文学部の学びとライフデザイン」と現在のほかの勉学への接合（2020 年度入学者）

図 2-4 は 「文学部の学びとライフデザイン」（2020 年度入学者）の現在のほかの勉学への接合度度である。これをみると、同科目のほかの勉学への接合度は「役にたっている」に該当する 4 と 5 を合わせると、82.9%と 8 割を超える。その一方で、「どちらともいえない」と回答する学生は 17.1%だった。しかし「役に立っていない」「まったく役に立っていない」は皆無であった。本科目は、文学部のキャリア科目という位置づけで開講されているため、他科目との接合は必ずしも容易ではないが、今回の結果は満足のいくものになった。来年度以降も少しでもほかの科目との接合度を高めることができるような工夫したい。

（３）メジャーの構成

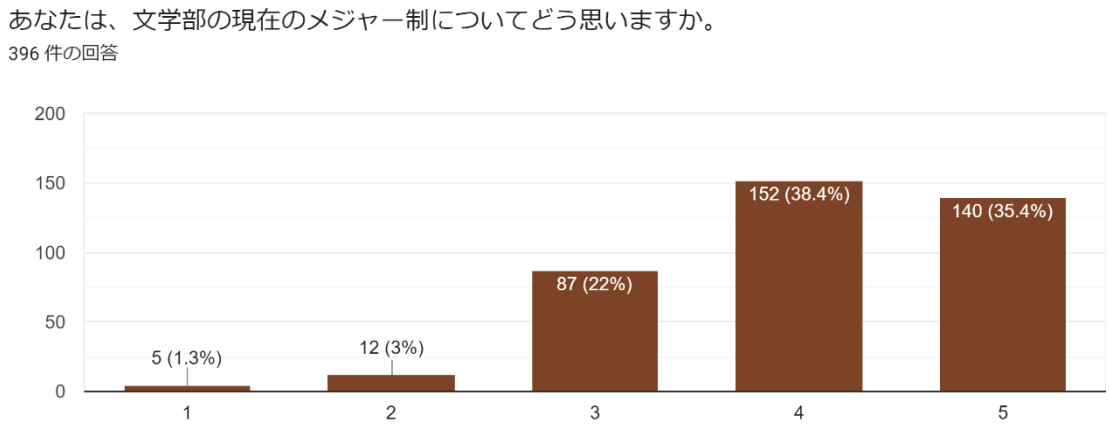


図 3 「メジャー制への意見」

図 3 は、メジャー制への意見である。これをみると、「賛成」が 35.4%、「とても賛成」が 38.4%と全体の 7 割を超える 73.8%の学生が賛成している。一方、「やや反対」が 3.0%、「と

ても反対」が 1.3%と反対はわずか 4.3%にとどまる。「どちらともいえない」と回答する学生が 22%いたことについての分析が必要ではあるが、全体的にみてメジャー制が文学部生に大きく支持されていることがわかる。

（4）イントロダクトリー・ベーシック・アドヴァンストの段階別科目編成

イントロダクトリー・ベーシック・アドヴァンストの段階別科目の満足度と理解度については、2020-2021 年度入学者と 2017 年度以前-2019 年度入学者に分けてみていく。

① 2020-2021 年度入学者

「イントロダクトリー科目」満足度

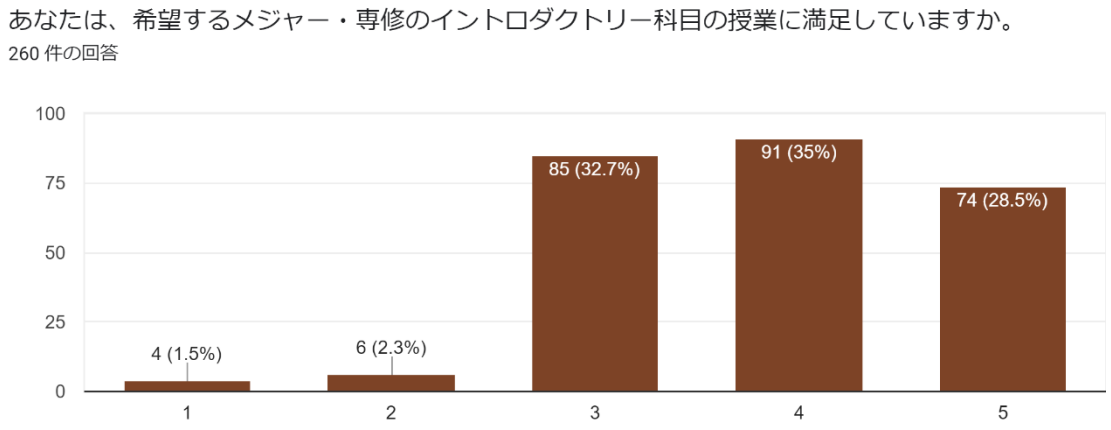


図 4-1 「イントロダクトリー科目」満足度（2020-2021 年度入学者）

図 4-1 は、現 1～2 年生の希望するメジャー・専修の「イントロダクトリー科目」の満足度である。これをみると、「イントロダクトリー科目」の満足度は 4 と 5 を合わせると、63.5%の学生が満足していると回答している。満足していない 1 と 2 の回答者が 3.8%であることからみても、「イントロダクトリー科目」は総じて満足度の高い授業を提供しているといえる。ただし、「どちらともいえない」に該当する 3 の回答者が 32.7%いるため、この学生層にも満足度を高めるように点検する必要がある。

「イントロダクトリー科目」理解度

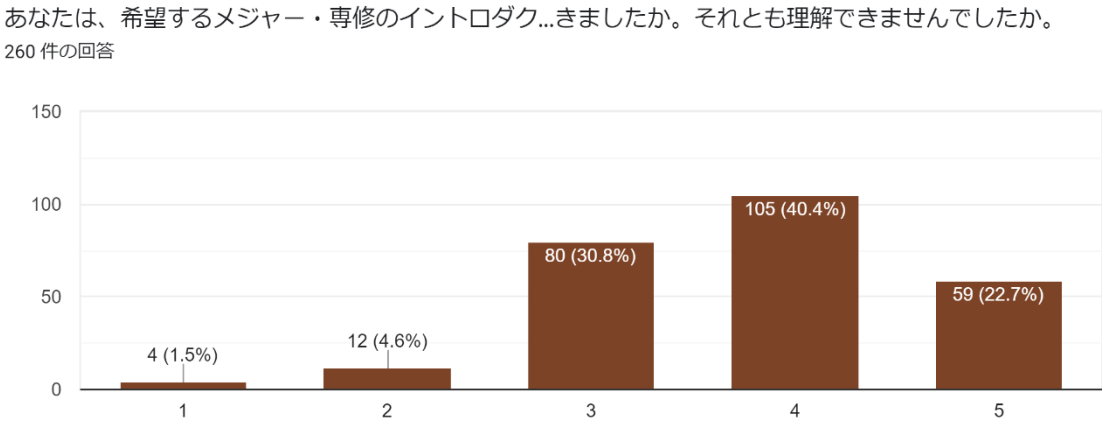


図 4-2 「イントロダクトリー科目」理解度（2020-2021 年度入学者）

図 4-2 は、現 1～2 年生の希望するメジャー・専修の「イントロダクトリー科目」の理解度である。これをみると、「イントロダクトリー科目」の理解度は 4 と 5 を合わせると、63.1%の学生が「理解できている」と回答している。「理解できていない」1 と 2 の回答者は、6.1%と 1 割以下にとどまっており、学生は「イントロダクトリー科目」を総じて理解しているといえる。ただし、「どちらともいえない」に該当する 3 の回答者が昨年の 16.9%から 30.3%に増加したため、これらの学生層も理解度を高められるように点検する必要がある。

「ベーシック科目」満足度

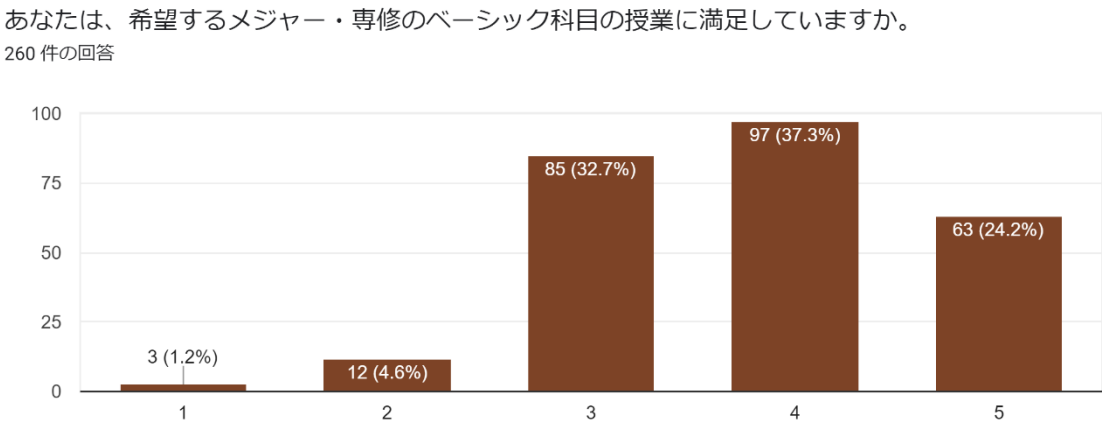


図 4-3 「ベーシック科目」満足度（2020-2021 年度入学者）

図 4-3 は、現 1～2 年生の「ベーシック科目」の満足度である。これをみると、「ベーシック科目」の理解度は 4 と 5 を合わせると、61.5%の学生が「満足している」と回答している。一方、「満足していない」1 と 2 の回答者は 5.7%と 1 割に満たない。この結果から、現 1～2 年生は「ベーシック科目」に総じて満足していると判断できる。ただし、「どちらともいえない」に該当する 3 の回答者が 32.7%いる。この学生層の満足度を高められるように点検する必要がある。

「ベーシック科目」理解度

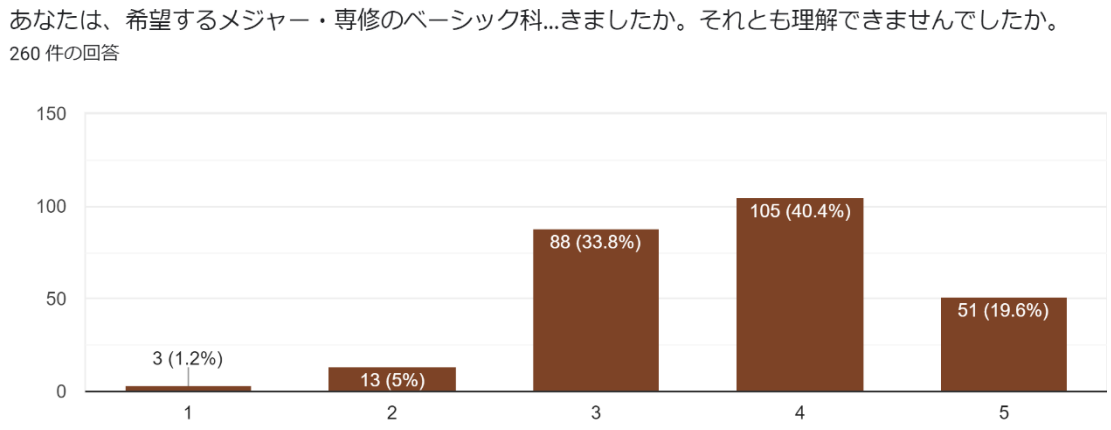


図 4-4「ベーシック科目」理解度（2020-2021 年度入学者）

図 4-4 は、現 1～2 年生の「ベーシック科目」の理解度である。これをみると、「ベーシック科目」の理解度は 4 と 5 を合わせると、60.0%の学生が「理解できている」と回答している。一方「理解できていない」1 と 2 の回答者は 6.2%と 1 割に満たなかった。この結果から、現 1～2 年生は「ベーシック科目」を一定程度理解できていると判断できる。ただし、「どちらともいえない」に該当する 3 の回答者が 33.8%いる。この学生層にも理解度を高められるように点検する必要がある。

② 2017 年度以前-2019 年度入学者

「イントロダクトリー科目」満足度

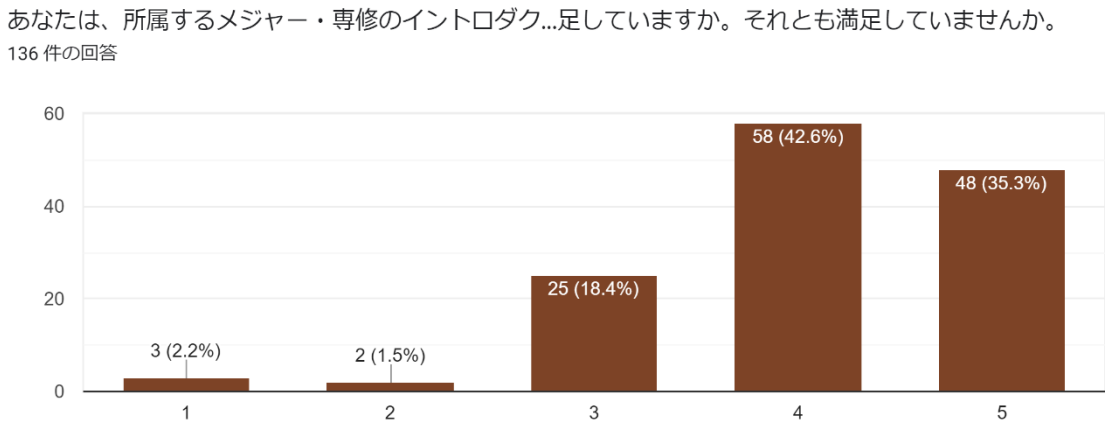


図 4-5 「イントロダクトリー科目」満足度（2017 年度以前-2019 年度入学者）

図 4-5 は、現 3 年生以上が所属するメジャー・専修の「イントロダクトリー科目」の満足度である。これをみると、「イントロダクトリー科目」の満足度は 4 と 5 を合わせると、77.9%の学生が「満足している」と回答している。図 4-1 で示したメジャー・専修に所属前の学生と比較すると満足度が高くなっている。また「満足していない」1 と 2 の回答者はわずか 3.7%にとどまっており、メジャー・専修に所属後の学生に対しても「イントロダクトリー科目」は総じて満足度の高い授業を提供しているといえる。ただし、「どちらともいえない」に該当する 3 の回答者が 18.4%いるため、この学生層にも満足度を高めるように点検する必要がある。

「イントロダクトリー科目」理解度

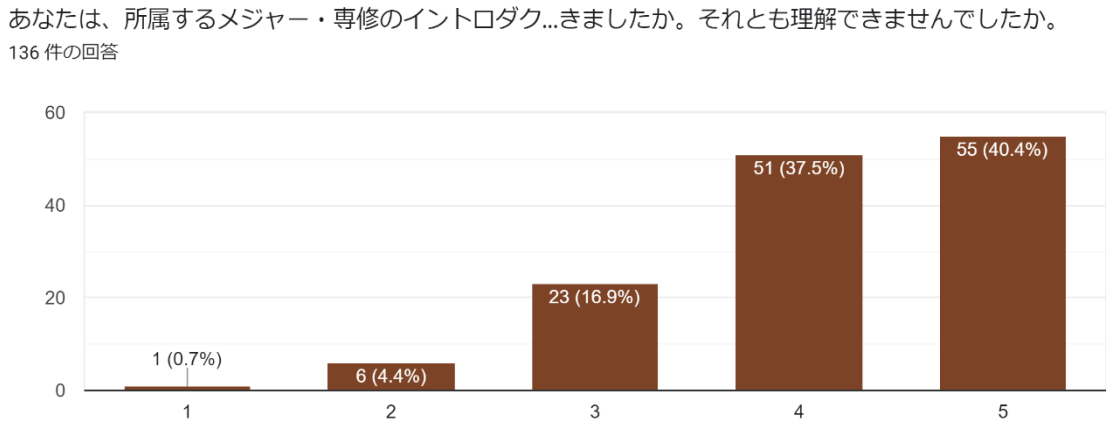


図 4-6 「イントロダクトリー科目」理解度（2017 年度以前-2019 年度入学者）

図 4-6 は、現 3 年生以上が所属するメジャー・専修の「イントロダクトリー科目」の理解度である。これをみると、「イントロダクトリー科目」の満足度は 4 と 5 を合わせると、77.9%と 8 割近い学生が「理解できている」と回答している。一方、「理解できていない」1 と 2 の回答者はわずか 8.5%にとどまっており、メジャー・専修に所属後の学生が「イントロダクトリー科目」を総じて理解していると判断できる。ただし、「どちらともいえない」に該当する 3 の回答者が 23.8%いるため、この学生層にも満足度を高めるように点検する必要がある。

「ベーシック科目」満足度

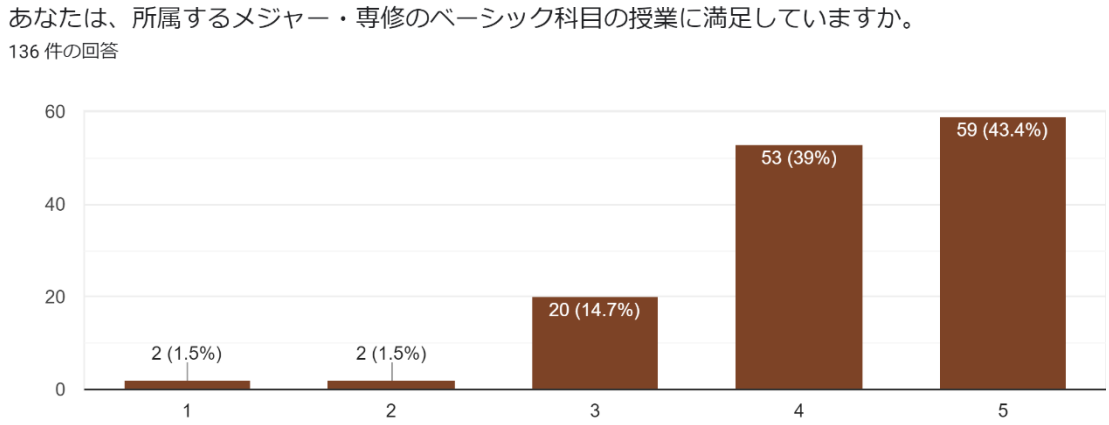


図 4-7 「ベーシック科目」満足度（2017 年度以前-2019 年度入学者）

図 4-7 は、現 3 年生以上が所属するメジャー・専修の「ベーシック科目」の満足度である。これをみると、「ベーシック科目」の満足度は 4 と 5 を合わせると、82.4%と 8 割を超える学生が「満足している」と回答している。一方、「満足していない 1 と 2 の回答者は 3.0%ときわめて少数である。この結果は、メジャー・専修に所属後の学生に対して「ベーシック科目」は満足度の高い授業を提供しているといえる。ただし、「どちらともいえない」に該当する 3 の回答者が 14.7%いるため、この学生層にも満足度を高めるようにさらに点検する必要がある。

「ベーシック科目」理解度

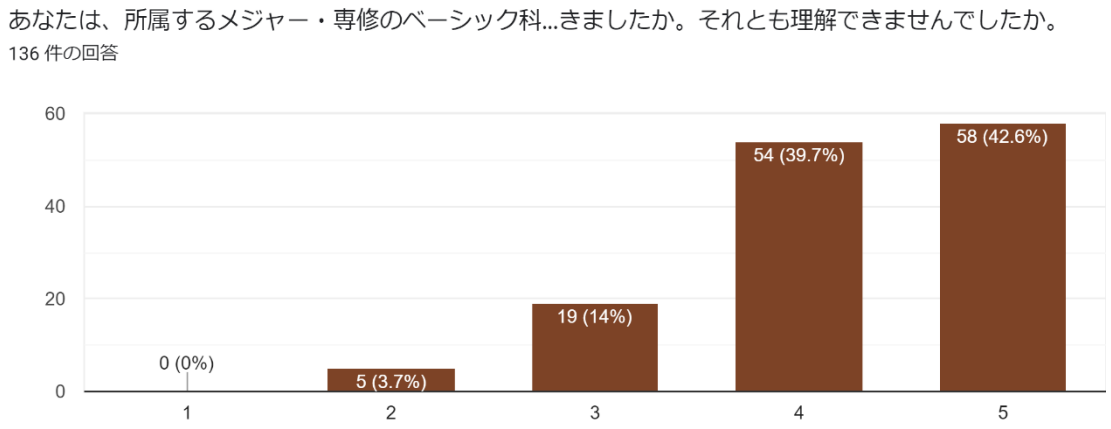


図 4-8 「ベーシック科目」理解度（2017 年度以前-2019 年度入学者）

図 4-8 は、現 3 年生以上が所属するメジャー・専修の「ベーシック科目」の理解度である。これをみると、「ベーシック科目」の理解度は 4 と 5 を合わせると、82.3%と 8 割を超える学生が「理解できている」と回答している。一方、「理解できていない 1 と 2 の回答者はわずか 3.7%にとどまっている。この結果から、メジャー・専修所属後の学生も、「ベーシック科目」を総じて理解できているといえる。ただし、「どちらともいえない」に該当する 3 の回答者が 14.0%いるため、この学生層にも理解度を高められるようにさらに点検する必要がある。

「アドヴァンスト科目」満足度

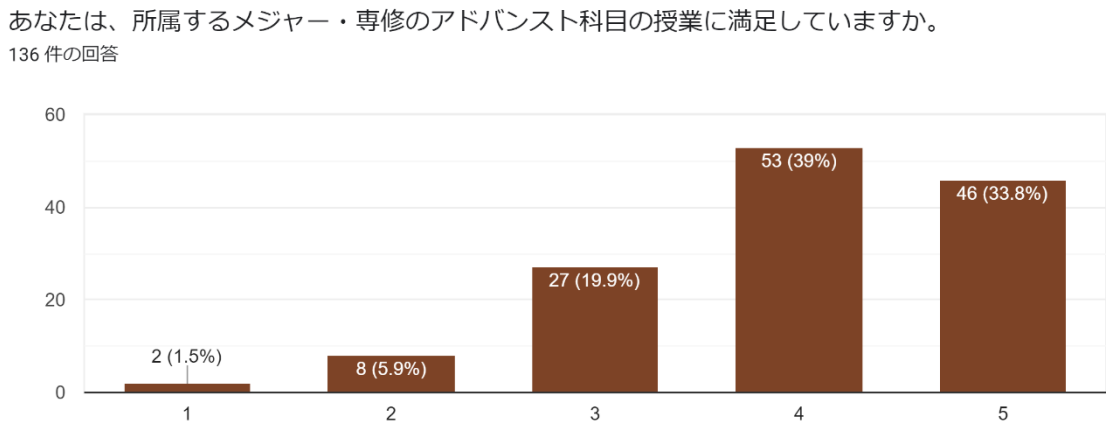


図 4-9 「アドヴァンスト科目」満足度（2017 年度以前-2019 年度入学者）

図 4-9 は、現 3 年生以上が所属するメジャー・専修の「アドヴァンスト」の満足度であ

る。これをみると、「アドヴァンスト科目」の満足度は 4 と 5 を合わせると、72.6%の学生が満足していると回答している。一方、「満足していない 1 と 2 の回答者は 7.4%にとどまっており、メジャー・専修所属後の学生に対して「アドヴァンスト科目」は総じて満足度の高い授業を提供しているといえる。ただし、「どちらともいえない」に該当する 3 の回答者が 19.9%いるため、この学生層に対しても満足度を高められるように点検する必要がある。

「アドヴァンスト科目」理解度

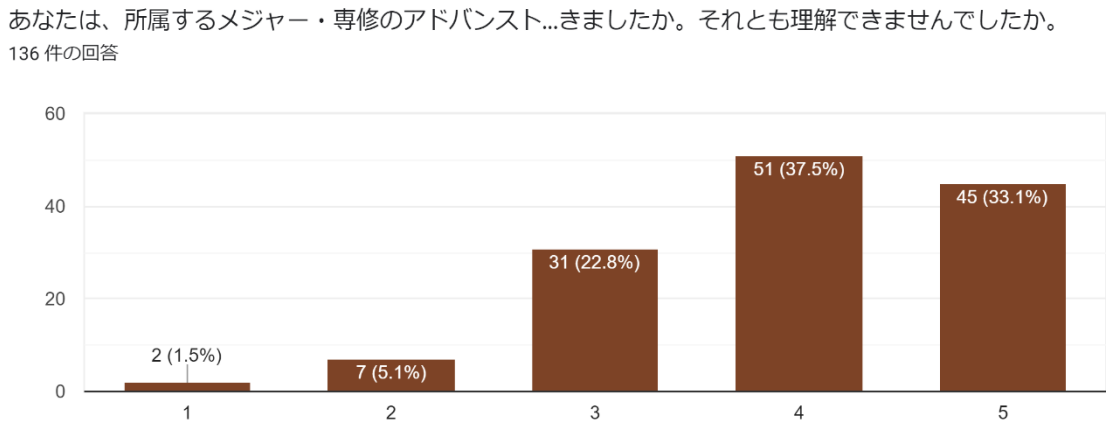


図 4-10 「アドヴァンスト科目」理解度（2017 年度以前-2019 年度入学者）

図 4-10 は、現 3 年生以上が所属するメジャー・専修の「アドヴァンスト科目」の理解度である。これをみると、「アドヴァンスト科目」の理解度は 4 と 5 を合わせると、70.6%と 7 割の学生が「理解できている」と回答している。「ベーシック科目」と比べるとやや理解度が低下するが、「アドヴァンスト科目」という位置づけからみても、自然な結果ともいえる。また、「理解できていない 1 と 2 の回答者はわずか 6.6%にとどまっている。この結果から、メジャー・専修所属後の学生も、「アドヴァンストク科目」を総じて理解できているといえる。ただし、「どちらともいえない」に該当する 3 の回答者が 22.8%と 2 割いるため、この学生層にも理解度を高められるように点検する必要がある。

（６）演習

（2017 年度以前-2019 年度入学者）

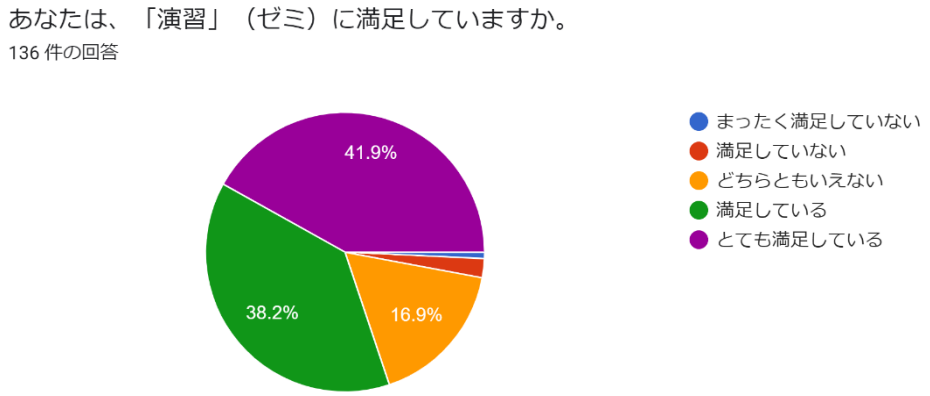


図 5　演習（ゼミ）の満足度（2017 年度以前-2019 年度入学者）

図 5 は現 3 年生以上の演習（ゼミ）の満足度である。同科目は、学生が満足度について言及しにくいため、他の項目より詳細に質問した。

同科目の満足度をみると、「とても満足」が 41.9%、「満足」が 38.2%で両者を合わせると 80.1%と 8 割の学生が満足していることがわかる。また、「どちらともいえない」が 16.9%、「満足していない」が 2.2%、「まったく満足していない」が 0.7%となった。

これらの結果から、本科目に対する学生の満足度は高いといえる。ただし、少数ながら 2.9%の学生が「満足していない」という現状をいかに打開するか、点検が必要となる。

（９）講義科目のアクティブ・ラーニング

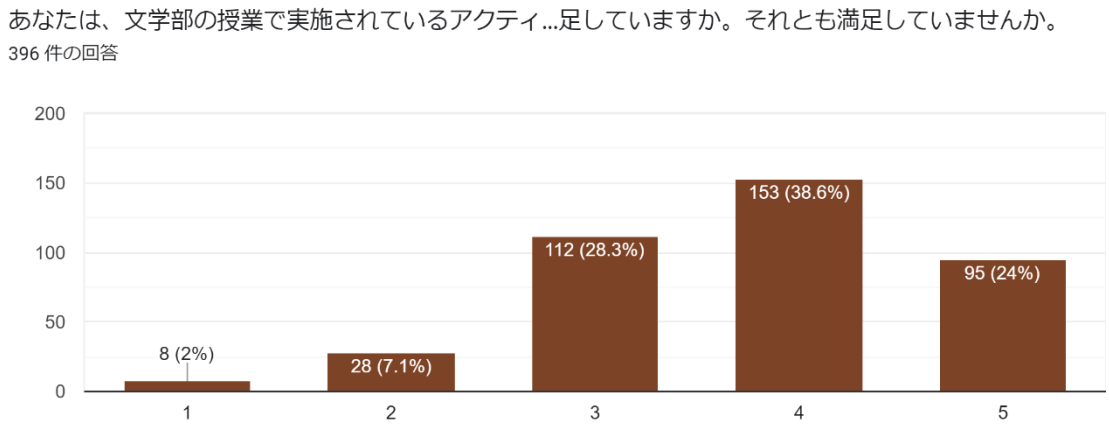


図 6 アクティブ・ラーニングの満足度

図 6 は講義科目のアクティブ・ラーニングの満足度である。これをみると、アクティブ・ラーニングの満足度は 4 と 5 を合わせると、62.6%の学生が満足していると回答して

いる。一方、「満足していない１と２の回答者は9.1%にとどまっており、文学部の講義科目のアクティブ・ラーニングの満足度は総じて高いといえる。ただし、「どちらともいえない」に該当する３の回答者が28.3%いるため、この学生層に対しても満足度を高められるように点検する必要がある。

（１１）カリキュラム・マップ

本アンケートでは「希望するカリキュラム・授業」について、自由記述で回答を求めた。表１は自由記述の回答のうち、名詞のみを抽出した頻出語である。文学部生は多様な背景をもった学生が多いため、少数意見をすくいあげることが重要である。そのため、１回のみの出現回数の名詞も抽出している。

表１　「希望するカリキュラム・授業」の抽出語

抽出語	出現回数		抽出語	出現回数		抽出語	出現回数
心理	24		メイン	2		オムニバス	1
社会	15		課題	2		グラフィック	1
文化	14		学芸	2		ゲーム	1
仏教	13		学生	2		スト	1
現代	11		学部	2		ストレス	1
文学	11		活動	2		スポーツ	1
芸術	9		環境	2		テーマ	1
哲学	9		関心	2		デジタル	1
思想	8		技術	2		ドラマ	1
表現	8		議論	2		ネット	1
音楽	7		近世	2		フォーカス	1
美術	7		形式	2		プログラミング	1
デザイン	6		経済	2		ヘルス	1
学習	6		研究	2		ベース	1
ゼミ	5		古事記	2		ボランティア	1
英語	5		講座	2		ポップ	1
作品	5		刺激	2		マナー	1
人間	5		自分	2		メディア	1
分析	5		取得	2		メンバー	1
歴史	5		儒教	2		ライフ	1
カルチャー	4		宗教	2		ラテン語	1
映画	4		人	2		意見	1
演劇	4		人類	2		衣食住	1
演習	4		政治	2		衣服	1
外国	4		生物	2		遺産	1
考古学	4		生命	2		宇宙	1
先生	4		西洋	2		運動	1
内容	4		設置	2		映像	1

アート	3		専門	2		英会話	1
アニメ	3		体験	2		駅	1
キリスト教	3		動き	2		音響	1
コミュニケーション	3		道教	2		科学	1
メジャー	3		比較	2		歌	1
栄養	3		舞台	2		華厳	1
応用	3		部分	2		解決	1
学科	3		福祉	2		解説	1
教育	3		仏典	2		海洋	1
興味	3		分野	2		絵画	1
経営	3		変化	2		絵本	1
広告	3		方法	2		開設	1
行動	3		幕府	2		概要	1
資格	3		漫画	2		概論	1
女性	3		履修	2		拡充	1
神話	3		臨床	2		学び	1
世界	3		恋愛	2		学術	1
卒論	3		論理	2		学問	1
本	3		うつ病	1		割合	1
サブ	2		お気に入り	1		患者	1
サンスクリット	2		アンケート	1		漢語	1
ファッション	2		イラスト	1		観光	1

これをみると、5 回以上の出現数を示した上位の頻出語は、心理 24 回、社会 15 回、文化 14 回、仏教 13 回、現代、文学 11 回、芸術、哲学 9 回、思想、表現 8 回、音楽、美術 7 回、デザイン、学習 6 回、ゼミ、英語、作品、人間、分析、歴史 5 回となった。

これらの結果は、自由記述では、思想・哲学系、表現・芸術系の科目を要望する声があがっていたとみることができる。新カリキュラムに向けて、これらの科目の設置または内容の反映について検討する必要があるだろう。

図 7 は、「希望するカリキュラム・授業」として回答のあった自由記述における名詞の上位 60 位（出現数 5 以上）の頻出語の共起関係を示したものである。これをもみると大きく 4 つのクラスターに分かれる。また、上述の頻出語とも一定の相関があることがわかる。それぞれのクラスターにみる頻出語の共起関係から、文学部生が希望するカリキュラム・授業を素描してみたい。

まず中央上のクラスターをみてみよう。このクラスターでは、「文学」が「現代」「芸術」「表現」「作品」「文化」に共起しており、文学部生の強い表現志向がみてとれる。これは、左側の小さなタテのクラスターに「美術」「音楽」が共起していることからも明らかである。

次に右には「思想」「哲学」「仏教」が「ゼミ」と共起しており、一定数の学生が「思想」

「哲学」「仏教」をゼミで学びたいという希望があることがわかる。

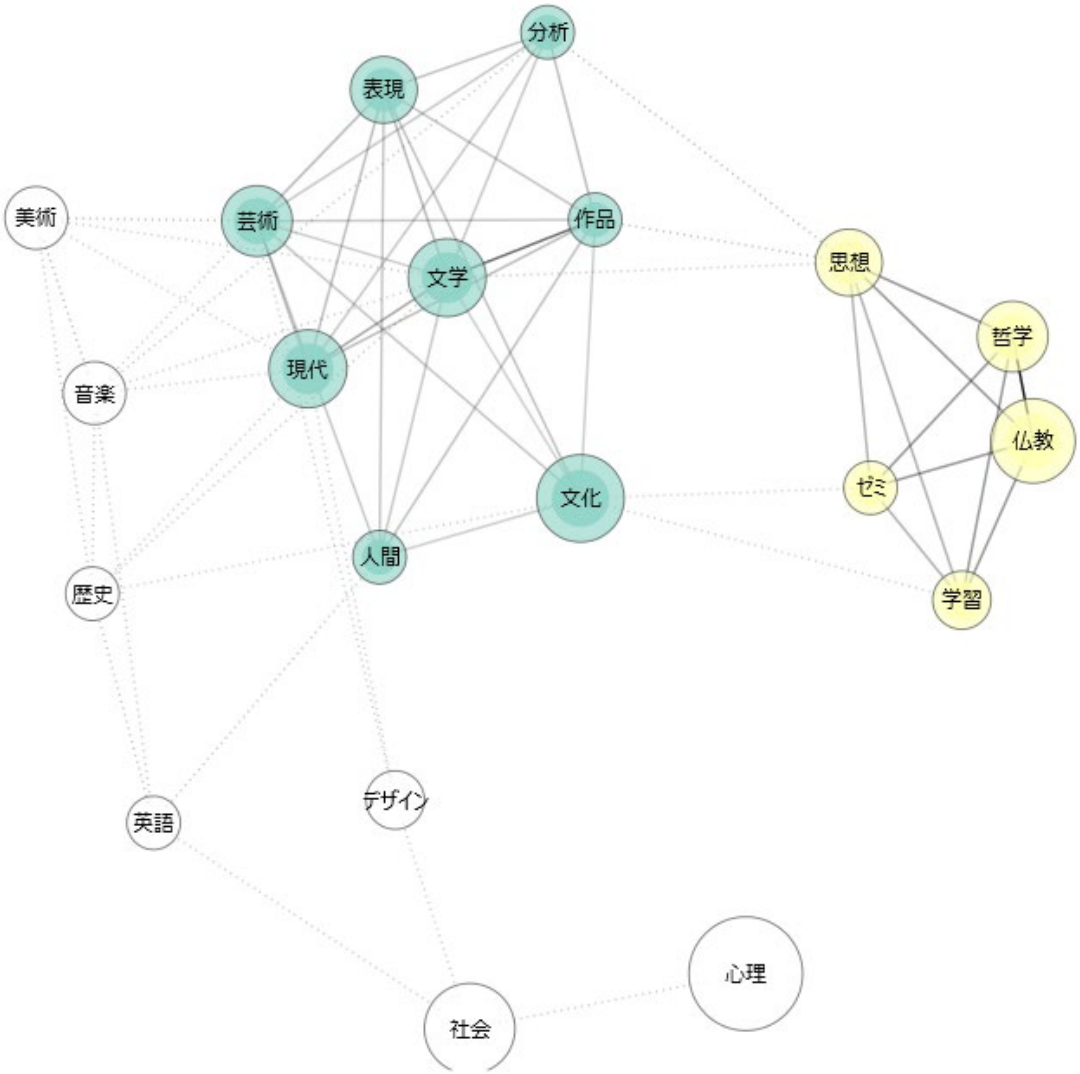


図 7 「希望するカリキュラム・授業」内容の共起ネットワーク
（名詞上位 60 位、出現数 5 以上）

次に、下のクラスターでは、「社会」「心理」「デザイン」などの語が共起している。また「社会」と「英語」が共起していのは、英語を社会で活かしたいという文学部生の実践的な姿勢があらわれたと考えられる。また「心理」への関心が文学部生のあいだに強いことは、近年一貫している傾向である。今後のカリキュラム改訂では、積極的に「心理」領域の授業を設置するか、ほかの関連授業でも可能な限り「心理」系の内容を取り入れるべきであろう。

以上、「2021 年度文学部生カリキュラム満足度アンケート」の結果から、カリキュラムポリシーの自己点検をおこなってきた。今後も、学生の満足度・理解度を最大限に重視し、学

生の意見・志向をとりいれながら、カリキュラムポリシーの自己点検を怠らず進めていきたい。

今回の「2021 年度文学部カリキュラム満足度アンケート」では、学生自治会の協力もあり、過去最多の 396 名の回答を得ることができた。今後、同種の調査を実施する際には、①「初年次セミナー」、「人間学」、「学部の学びとライフデザイン」など、多くの履修者をもつ授業の一環として調査を実施する、②学生自治会をはじめ学生に広く協力を求める—2 点を前提とすることで、さらに回答者を多く得ることができるように努めたい。

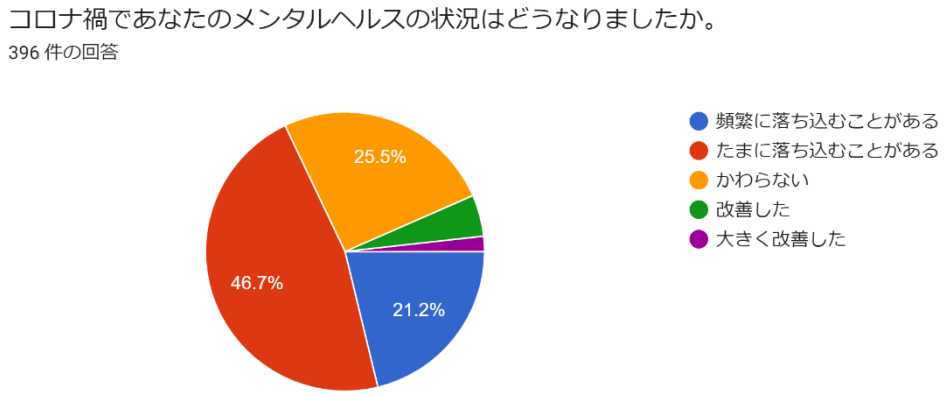
以上。

「2021 年度文学部生カリキュラム満足度アンケート」からみる
オンライン授業に対する学生評価

2021 年 8 月から 2021 年 9 月にかけて「2021 年度文学部生カリキュラム満足度アンケート」を実施し、396 名から回答を得た。内訳は、2017 年度以前 14(3.5%)、2018 年度 34(8.6%)、2019 年度 88（22.2%)、2020 年度 111（28.0%)、2021 年度 149（37.6%）であった。

以下、アンケートの結果から、学生のオンライン授業に対する評価について確認したい。

図 1 コロナ禍におけるメンタルヘルスの状況



コロナ禍におけるオンライン授業評価をみるまえに、学生をめぐる状況—メンタルヘルスと実家の経済状況の変化—について確認したい。

図 1 はコロナ禍における学生のメンタル状況の変化を示したものである。これをみると「頻繁に落ち込むことがある」が 21.2%、「たまに落ち込むことがある」が 46.7%となっている。両者を合わせると、67/9%の学生にコロナ禍でメンタルの減退がみられたことがわかる。このような厳しいメンタルヘルスの状況下で、大学の授業に臨んでいたことを教員は厳しく受け止めるべきである。

図 2 コロナ禍における家庭の経済状況

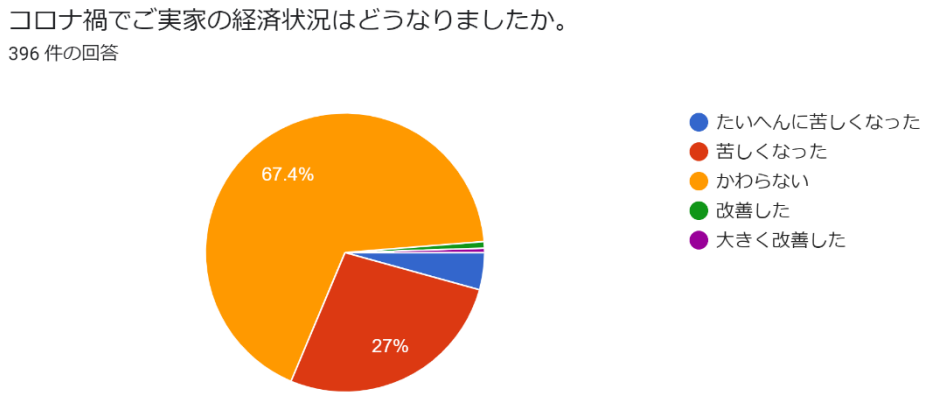


図 2 はコロナ禍における家庭の経済状況の変化である。これをみると「たいへん苦しくなった」が 4.3%、「苦しくなった」が 27.0%となっている。この結果は、新型コロナウィルス感染症の蔓延によって、3 割を超える学生の実家の家計が悪化したことを示している。

コロナ禍は、学生のメンタルヘルスの減退だけでなく、実家の経済状況の悪化も引き起こしている。授業を行う教員は、学生のメンタルヘルスの減退とともに、この事実を深刻に受け止める必要がある。

図 3 コロナ禍における対面授業評価

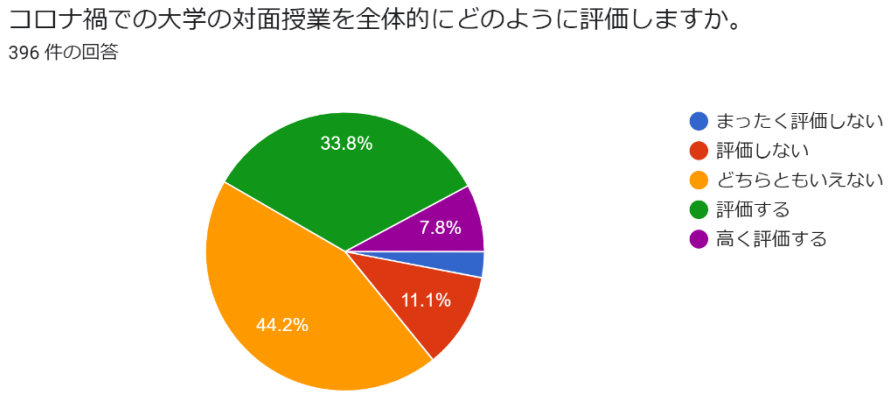


図 3 はコロナ禍における対面授業に対する学生の評価である。これをみると「高く評価する」が 7.8%、「評価する」33.8%となっており、肯定的に評価すると回答した学生は 41.6%と半数以下になった。これに対して「評価しない」は 11.1%、「まったく評価しない」は 3.0%であり、否定的な評価は 14.1%であった。目立つのは、「どちらともいえ

ない」と回答する学生が 44.2%と半数近くに及んだことである。この結果が、コロナ禍によるものなのか、対面授業を実施した科目によるものなのか、さらなる分析が求められる。

図 4 オンライン授業評価

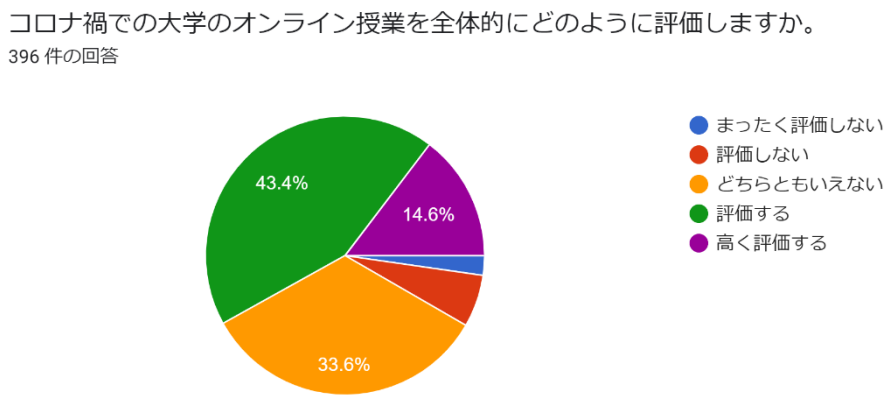


図 4 はコロナ禍におけるオンライン授業に対する学生の評価である。これをみると「高く評価する」が 14.6%、「評価する」43.4%となっており、肯定的に評価すると回答した学生は 58.0%と 6 割近くになった。これに対して「評価しない」は 6.1%、「まったく評価しない」は 2.3%であり、否定的な評価はわずか 8.4%と 1 割に満たなかった。

結果として、コロナ禍における文学部の授業では、対面授業よりもオンライン授業の方が、相対的に評価が高くなった。コロナ禍における授業はオンライン授業が多く、対面授業が少数だったことを勘案する必要がある。

しかし、先述したコロナ禍における学生のメンタルヘルスの深刻な状況、実家の経済状況の悪化という、学生をめぐる困難な状況・背景からみれば、文学部のオンライン授業は、学生から一定程度の評価を得ていると考えられる。

ただし、「どちらともいえない」と回答する学生は、対面授業と比較すると 10%ほど低いものの、33.6%と 3 割を超えている。来年度以降、オンライン授業を実施する場合は、さらなる授業の改善が必要だと思われる。

以上。